

午後には陽のあたる場所

菊池桃子

午後には陽のあたる場所

菊池桃子

扶桑社





ISBN978-4-594-07393-0

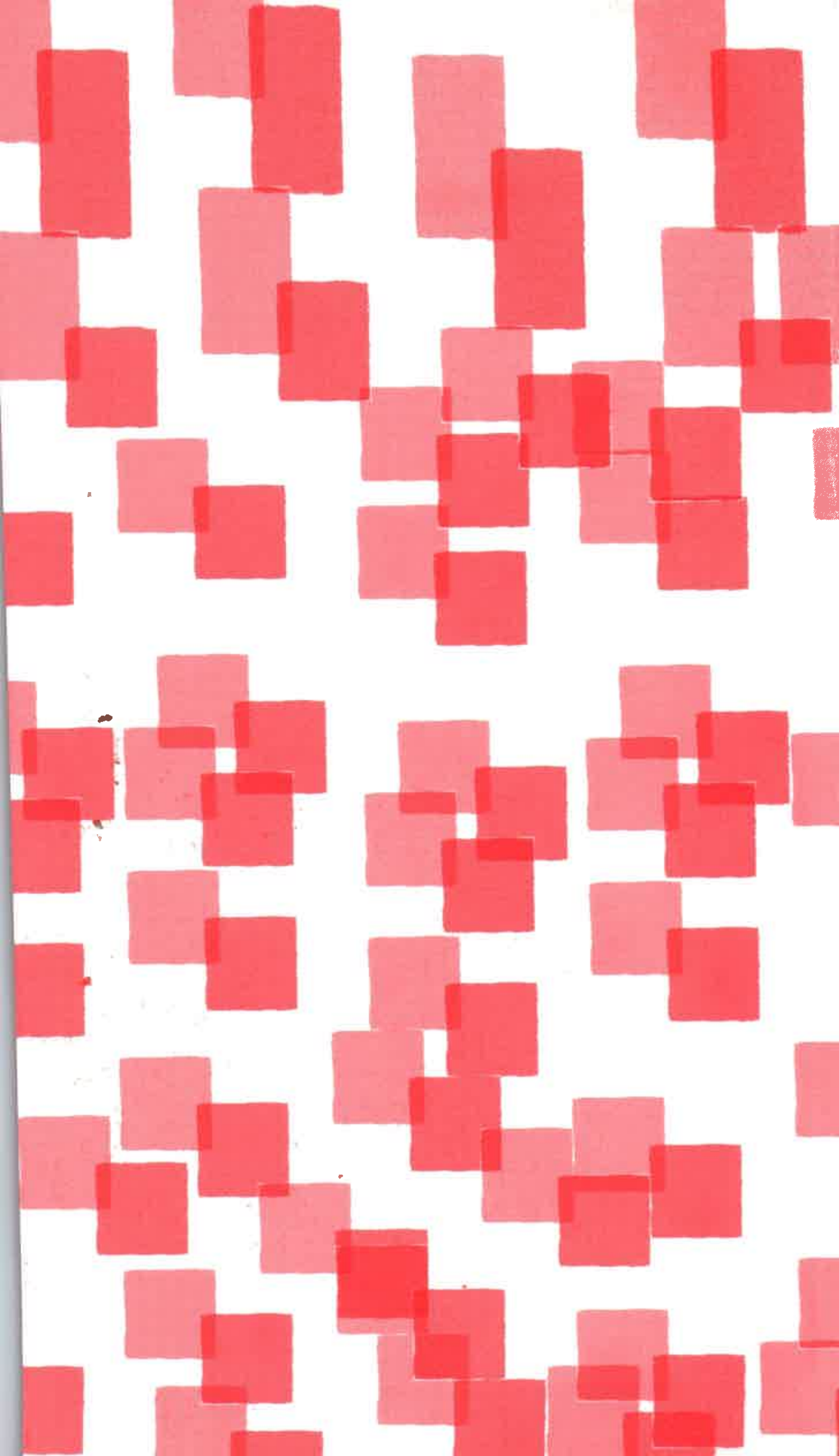
C0095 ¥1300E

定価:本体1300円+税

扶桑社

菊池桃子
Momoko Kikuchi

1968年5月4日東京都生まれ。
1983年、アイドル雑誌『Momoco』創刊号の表紙を飾りデビュー。翌年、映画『パンツの穴』のヒロインとしてスクリーンデビューし、同年、『青春のいじわる』でアイドル歌手としてもデビュー。ブロマイドの年間売り上げ記録1位や、1985年の日本武道館のコンサートでは、ビートルズの持つ観客動員数の記録を抜くなど社会現象となり、清純派アイドルとして絶大な人気を誇る。第26回日本レコード大賞新人賞、日本レコードセールス大賞、エランドール賞新人賞など、数々の賞を受賞。また4枚目のシングル『卒業 -GRADUATION-』から『アイドルを探せ』までの7枚連続オリコン1位の売り上げを記録。女優・歌手活動のほか、CM・ナレーション・ラジオパーソナリティ・講演・婦人雑貨のブランドプロデュースを務めるなど多彩な方面で活躍。2012年3月法政大学大学院政策創造専攻修士課程修了。研究分野は「雇用政策を踏まえた人々のキャリア形成」。





午後には陽のあたる場所

菊池桃子

扶桑社

―まえがきにかえて―

夏の匂いが好きです。青草を蒸すような、強い陽差しが好きです。毎年この季節になると、あのころのことを思い出して、初心に帰り、襟を正す気持ちになれるからです。

2008年の夏、当時39歳のわたしは、額に汗をにじませながら、ゆるやかだけれど長く続く上り坂を歩いていました。

目的は、ある雑誌で知った〝女性キャリアカウンセラー〟に、進学の相談にうかがうためです。進学の相談というのは、息子のことでも娘のことでもなく、ほかならぬ、わたし自身のことでした。

「菊池桃子」という名前を見てこの本を手に取ってくださった方のなかには、アイドルとして活動していたころのことなら知っているという方が多いかもしれません。

わたしは16歳のときに、映画でスクリーンデビューし、続いてアイドル歌手としてもデ

ビューしました。以降、いくつものドラマや映画、ラジオ、雑誌などに出させていただきました。

そして、26歳のときに結婚。28歳のときには長男を、33歳のときには長女を授かり、子育てに忙しい日々を送っていたのです。

その後は、しばらく控えていた仕事も徐々に再開し、「順風満帆な人生ですね」などと言われたこともありました。

それに対して、笑顔で応えていたわたし。でも、そのころというのは、これからどうやって子どもたちを育てていけばよいのか、どう生きていけばよいのか、とても悩んでいた時期だったのです。

長女には障がいがありました。乳児期に脳梗塞を患い、手足には後遺症がありました。そして、障がいがあるゆえに、幼稚園や小学校を探すことが難しいという現実が、そこにはありました。地域での就学相談も頼りになりません。そんななかで、健康な長男と体の弱い長女を比べると、子どもたちを取り巻く社会構造に、疑問や憤りを感じずにはいられない日々を過ごしていました。

そして、わたし自身、どのように人生を歩んでいくべきなのかと。

そんなとき、ふと立ち寄った書店で手にした雑誌に、大学院で「雇用政策」を学んでいる、奥山さんという女性のインタビュー記事が載っていました。

「雇用政策のなかには、人材育成の観点から、〝キャリア形成論〟が展開されます。〝キャリア形成論〟とは、雇用形態の多様化、男女共同参画、仕事と生活のより良いバランスなどを考えながら、人生設計に役立つ能力や知識を身につける学問のこと」、大まかにいうと、そんなことが書いてあります。

奥山さんは大学院生ではありましたが、キャリアカウンセラーであり、会社の経営者であり、高校生の男の子を持つ母親でもありました。プロフィール写真の姿は、いきいきとエネルギッシュに見えました。

その記事を読んだわたしには、今の自分が学ぶべきこと、なすべきことのすべてがそこにあるように思えたのです。

思い立つとじっとしていられない性分のわたしは、早速、奥山さんにキャリアカウンセリングの予約を取り付けたのでした。

「菊池さん、ユングという学者を知っていますか？」

お話しして随分たってから、奥山さんがわたしに尋ねました。

ユング、フルネームをカール・グスタフ・ユングは、フロイトと同時代に生きた、著名なスイス人の精神科医であり、心理学者。「キャリア形成論」を学んでいくうえで、避けては通れない人物です。恥ずかしながら、このときに初めてユングの存在を知ったわたしに、奥山さんは優しく話し始めました。

「ユングは、人間の人生を一日の太陽の運行にたとえ、人生を4つの時期に分けて解説したの。陽が昇る午前中を少・青年期と成人前期。午後は、中年期と老年期に。人生における〝正午〟、つまり午後が始まるのは、40歳前後だと定義づけたんです」

「わたし、今39歳です。ユングのいう〝人生の正午〟ですね？」

「そう、ぴったり。人生の正午に入ると、人は〝午後の生き方〟を想像するようになるといいます。午前中と午後とでは、陽のあたり方が変わってくるので、人生について、何かと考えるようになるのですね。菊池さんはどうですか？」

「背伸びをしたら夕方の雰囲気も覗けそうですし、午前が過ぎたことは自覚しています」

奥山さんはさらに微笑みました。

「菊池さん、この〝正午〟を意識して、あなた自身の午後を輝かせてほしいわ。今日ここに来たのは、きっと必然ね。午前中に得た栄養を活かしながら、人生のこれからを考えるために」

このお話を聞いたとき、わたしは動きだそうと心に決めました。こんなにも胸が躍ったのは久しぶりのことでした。

人生の午前中に陽のあたっていた場所とは違う場所に、午後には陽があたる。それは、わたしの中年期以降の人生をきっと楽しいものにしてくれるだろう、そう確信しました。

もともと自分に自信があるタイプではないし、迷い、涙することも多い。そんなわたしが人生の午後に、心地よい陽射しをあびている充実した日々。さらに気持ちのよい陽だまりに身を委ねるために、もっと頑張ろう。もっともっと頑張ろう。

そして「キャリア形成論」を学ぶことは、わたしと子どもたちが経験してきたことが役に立つかもしれない。誰かの役に立てるかもしれない。芸能界という、多くの方に広く発信できる機会に恵まれているわたしの役割ではないだろうか。

そんなことを、帰りの長い坂道を下りながら思っていました。

その後、40歳で法政大学大学院・政策創造専攻の修士課程に進学し、43歳のときに修士

課程を修了しました。現在は、芸能界の仕事と両立して、母校・戸板女子短期大学の客員教授として、教鞭をとっています。
また、離婚も経験し、シングルマザーとして、子育てにも奮闘中です。

人生は、本当に予測のつかないことの連続です。
そして、いくつになってもあきらめない限り、成長できます。やり直しができるのです。
人生、いつでも「これから」。
毎年、夏にさしかかるころには、そんなふうに、気持ちを新たにしています。

すでに、わたしと同じく人生の午後にいる人にも、午前中の人にも、この本が、ご自分のキャリアについて考えていただく一助となれば幸いです。
そして、キャリア教育の授業を行っている、不肖わたくし菊池桃子先生としても、とても嬉しく思います。

菊池桃子

もくじ

第二章 デビュー

第三章 妻として、母として

第四章　子どもたち

第五章　人生の正午

第六章　午後には陽のあたる場所



客員教授としての授業風景

プロローグ　〝キャリア〟という言葉

２０１５年７月２日、わたしは、戸板女子短期大学のホールで、１年生に向けて「女性のキャリア形成」の授業をしていました。

教壇に立つようになって４年が過ぎますが、毎年、初回の授業をするときは緊張します。息を整えて挨拶と自己紹介をして、授業に入ります。

この日の予定は、「キャリアという言葉の解説」「今後の人口構成の予測推移を見ながら日本の課題を知ること」「女性と男性の働き方の違い」「社会から向けられている女性活躍への期待」などなど盛りだくさんです。

「質問があったら、話の途中でも手を挙げてくださいね！」

いつもより大きな声で学生に声をかけます。

わたしも学生のころはそうでしたが、お腹が満たされた昼食後の授業は、眠気に襲われがちです。でも今日は、キャリア教育のなかでわたしが最も大切にしている「キャリア」という言葉の定義を解説する日。

取り立てて目新しい言葉ではありませんが、「キャリア」という言葉は、曖昧に覚えるともったいないと感じています。語源を確認して、意味をしっかりと頭に入れることで、

今後の人生の描き方、そして日々の過ごし方が丁寧になるとわたしは思っているのです。

集中して聴いてもらいたくて、真っすぐに学生たちを見つめます。

そして、質問します。

「キャリア（career）という言葉は、何語かわかりますか？」

「英語？」「ポルトガル語？」「わざわざ聞くのだから、ひねってるのよ、中国語とか？」

教室内がざわつきます。

「答えは、ラテン語です。キャリアの語源についてはいくつか説がありますが、中世ラテン語の〝轍（わだち）〟をキャリアと言ったという説が世界的に最も有名です。轍とは、馬車や牛車が通過したあとに残る車輪の跡のこと。これを時間的、空間的概念に置き換えて、人の経歴や足跡を表す言葉の意味として、キャリアという言葉が使われるようになりました」

学生は首をひねって、理解を示しません。そんなときは、歩いて身体で表現しながら解説を続けます。

解説スタートの立ち位置は、教室の端っこです。

「1968年5月4日に、わたしは生まれました。ここが菊池桃子の〝キャリアのスター

ト地点〟。わたしに車輪がついていると想像してみてください。スタート地点が0歳ですから、ここから、一本の線を描くように歩いてみますね、1歳、2歳、3歳……と、菊池桃子は車輪の跡をつけながら進んでいきます」

そう言いながら、実際に歩いて距離を目で確かめてもらいます。

「ここが3歳の地点です。これまでの道のりを振り返ってみましょう。3年分の轍を見ることができます。これが、人の〝キャリア〟です。3歳なら3歳なりの足跡が見えますよね。たとえば〝水ぼうそうになった〟〝風疹にかかった〟という病歴や、すでにお稽古ごとを始めていたという経歴が見えることもあるでしょう」

教室を歩きながら解説すると、不思議と学生の視線が集まるのです。

「3歳のあとも、菊池桃子は車輪の跡をつけて進み続けます。4歳、5歳、6歳……。このあたりで小学生ね。中学生、高校生、短大生。今の皆さんと同じです。ここで立ち止まって振り返って見てください。皆さん自身は、どんな轍をつけましたか？　そして、振り返ったときに轍、つまりキャリアが順調だった人は？」

そう尋ねると、数人が手を挙げてくれます。

「では、イマイチ納得できないキャリアを残した人は？」

恥ずかしそうに数人が手を挙げてくれました。

「キャリアという考え方のいいところは、心がけ次第で明日からのキャリアをより良く変えていけると思えることです。今日立ち止まって、過去を見ることより、これから地面に刻むであろう明日からの轍を考えて、目標を描く。こんな道に進みたいという、未来の自分の姿を想像しながら、『目標のために今、自分は何をすべきか？』と考えることが、キャリア教育の意味です。あなたの工夫次第で、未来のデザインの仕方は、いかようにも変わります。だから今、未来のあなたの姿を熱心に描いてみてください。そして、そのために今できることは何かを考えてください」

最初の授業ということもあって、たいていの学生たちは、真剣な顔をして考え込みます。

余談ですが、あんまり真面目で重い空気が漂ったときには、わたしは実年齢の47歳の地点まで歩き、『こんなに老けてしまいましたぁ』と言うと学生に笑いが起こり、場が和んだりします。時には調子に乗りすぎて、もっと歩いて「おばあちゃんになっちゃった」と言ったりもしますが、そのときも笑ってくれるかどうかは……。なかなか笑いを取るのって難しいものですね。

「キャリア」という言葉は、とかく職業と結び付けて考えることが多いのですが、仕事の経歴を指す場合は「ワーク・キャリア」という言葉を使うほうがわかりやすいでしょう。

わたしが歩いて解説したのは、生まれてから人生を終えるまでの生涯を表す「キャリア」という言葉の使い方。その場合は「ライフ・キャリア」といいます。

授業のあとに、学生たちに提出してもらった講義メモには、近い将来の〝夢〟や〝とるべき行動〟が書かれていました。２年間で卒業してしまう短大生の場合、早くから就職活動を意識するため、そこに書かれていることはとても具体的な夢です。

「航空会社を目指したい。語学の復習を頑張ります」

「アパレル関係に進みたい。けれど、まだ知らない企業もあるから調べて挑戦の幅を広げたい」

「もっと勉強をしてから就職したいので、卒業したら四年制の大学に編入しようと思っています。だから今は良い成績をとっておきたい」

「キャリアの意味がわかったので、今、何をすればいいのか、学内のキャリアセンターに

相談にいこうと思います」

こういうコメントを見て嬉しいのは、今という時間と将来を繋げて考えてくれたことです。これを〝キャリア準備〟とでもいえばいいのでしょうか。学生の間はたくさん楽しんで良い時間を過ごしてもらいたいという願いもありますが、キャリア準備は早いほうが賢明です。

わたしは、小・中学生やその保護者の方々に講演をさせていただくことがあるのですが、その際、早くからキャリアを意識することをオススメしています。

そして、小学生の保護者の方々にお伝えするには、我が家のエピソードがイントロ部分にちょうどいいかなと、こんな話をしたことがありました。

息子が小学6年生のときに、困ったような顔をして、わたしに相談してきました。

「僕は大人になったときに何をしたらいいのかな。まだ夢を持ってないんだ」

「夢……」

「友達のあっくんは歯医者さんになりたいって言うし、ショウタくんは弁護士になりたいって言うし、ほかの子もサッカー選手とか、小学校の先生になりたいとか言ってて……」

わたしは息子にこう言いました。
「今は夢を持てなくてもいい。だけど、学校でいろいろな科目を勉強するときに、自分は何に興味があるのか、何が得意なのかを考えるようにするといいのよ。これから見つけていけばいいの」
みんなに平等に用意された義務教育という学びの期間は、得意不得意にかかわらず多くの科目に触れるチャンスと意識してほしいと伝えたのです。

小学生や中学生は、将来の職業的な「夢」が見つかっていないという子がほとんどです。
「何に興味があり、何に才能がありそうか？」
それを考えながら、あらゆる授業を受けてほしいと思うのです。
キャリア教育は、年齢なりにかみ砕いてわかりやすい言葉で、なるべく早期から始めたほうがいいと思っています。
なぜかというと、「自分で自分の将来を考えること」は、「そのために自分は、今、何をすればよいか」を考えることに繋がり、早いうちから、自分で考えて動ける人間に育っていくからなのです。

ここで紹介したのは、わたしの授業のほんのさわりの部分。
人生の〝轍〟は、先の見通しや予測が難しい。
だからこそ、みんなと一緒に考えていきたい。
そして、そんな時間が、わたしは大好きです。



七五三

第一章　キャリア始まる

桃子

「あなたは、どんな人ですか？」
そんな質問を誰かにされたとしたら、幼いころのわたしは、「自信のない人です」と、答えたでしょう。
もちろん、回答例はほかにもたくさんあります。
真面目な人ですとか、意外とノリがいい人ですとか、優しい人でありたいです、などなど。
どれも偽りではない、わたしの一面。でも、これまでの人生を振り返ってみて、自分がどんな人だったのかと考えてみると、やはり「何ごとにも自信のない人」だったように思います。
こう言うと、ネガティブな性格のように聞こえるかもしれません。自信がなかったのは事実ですが、でも「その分、人より努力しようじゃないか！」と、いつも自らを奮起させ

てきました。つまりわたしの場合、頑張ろうと前向きな気持ちにさせるキッカケだったのです。

自信がなかったからこそ試行錯誤して気づいたこと、成長できたエピソードなどはおいおい書いていきますが、なぜ常に「自己否定してしまうわたし」になっていったのかについて考えてみました。

1968年5月4日。午前9時を少しまわったころ、東京都品川区内の病院でわたしは生まれました。

母は、1週間前につけたばかりの名前を呼びながら、生まれたばかりの「わたし」にこう話しかけたそうです。

「桃子、きっと大丈夫。みんなあなたの顔を見たらコロッと態度を変えて、目じりを下げてかわいがってくれるから、大丈夫よ」

そう。わたしが生まれてくることを、周囲は歓迎していなかったのです。

4歳上の兄が生まれるとき、予定日よりも2カ月半早い出産でした。母は出産の途中で昏睡状態に陥り、かなり危険な状態だったと聞いています。

くわえて、産後の肥立ちも悪く、しばらく寝込んだうえに甲状腺に腫瘍が見つかり摘出手術を受けていました。腫瘍は幸い良性でしたが、手術後は経過観察中だったため、安静にしているように言われていました。そんな体調で、さらにまた妊娠してしまうなど、決して望ましいことではなかったのです。

そんな状況下で授かった、わたし。

反対されても産みたいという母の想いと、その気持ちにうなずく父。「出産は危険だ」と猛反対の親戚一同。そんなワケありのお産でしたから、出産当日も母は一人で病院に行き、一人で分娩室に入り、気丈に頑張ったのです。

母は、わたしを妊娠したことに気づいたとき、素直に喜んだそうです。

誰よりも自分の体力の回復を実感していましたし、もともと妊娠しづらい体質だったらしく、結婚してから兄を授かるまで6年かかっていたので、チャンスは大切にしたいと思っていたのでしょう。

「反対されても、この子は絶対に産むんだ！」

そう心に誓っていたとあとから聞きました。

兄を出産した後、母は安静にしているように言われていたため、父と生まれたばかりの兄と一緒に、母の実家で祖母のサポートを受けながら暮らしていました。そんななかでのわたしの妊娠。父と母は妊娠を周囲に気づかれないようにするため、引っ越しを敢行しました。

表向きは、「『体調が整ってきましたので、二人で暮らしてみます』とし、祖母は、そんな夫婦を頼もしいと見送ったそうです。

引っ越し先の新しい土地では、同世代のママさん友達ができ、兄の世話を手伝ってくれるような温かいコミュニティーもあったそうです。

気になる「実家への妊娠報告」ですが、妊娠8カ月目を迎えた3月のある週末、父と母は兄の手をひいて、電車で1時間ほどの母の実家に向かいました。

大きくなったお腹は、もう後戻りできないことを示していました。

喜んでもらえるのか、叱り飛ばされるのか。

終戦直後に夫と生き別れした祖母は、身寄りのない地に移り住み、3人の子どもを一人で育ててきた強者です。一喝されそうです。

「ただいまー」
母は懸命に明るい声をあげたそうです。
「よく来たねー、コウちゃん、会いたかったよー」
祖母は、まずは幼い兄を嬉しそうに抱き上げ、そのときようやく母のお腹に気づきました。
すると「わたし、コウちゃんと果物を買いにいってくるから」と言い、そそくさと出かけたそうです。きっと混乱していたのでしょう。
しばらくしてから帰宅した祖母は、母にこう言いました。
「体の弱いおまえが、お産で命をなくすようなことがあったら、孫は私が育ててやる！」
心配しているのか、怒っているのか、判断できないような言葉でした。
でも父と母には、その言葉は「産みなさい」という意味に聞こえたようです。
兄を妊娠したときには父方や母方、両家の祖父母が名づけ親になりたいと申し出てくれたそうですが、わたしの場合はいささが強引な妊娠だったせいか、申し出る人は現れず、

母が「桃子」と名づけてくれました。

母が、ふと手に取った本の中に中国の祝いごとについての解説があり、「たびたび中国の神話などに登場し、不老長寿や邪気払いの意味をもつ果物の〝桃〟は、長く珍重されてきた歴史があり、また美しい花を咲かせる点でも人々に愛されている」といった記述を見つけたそうです。

「我が娘も、人々に愛される子になってほしい」

生まれてくることを祝福されなかった赤ちゃんに、一発逆転ホームランのような名前をつけたいと思っていた父は大賛成したそうです（父は無類の野球好きでした）。

妊娠を秘密にしなければならなかったことや、名前をつけてくれる人がいなかったことなどを幼いころに聞かされたわたしは、「わたしって望まれない子だったんだ」とか、「生まれてこないほうがよかったのだろうか」と悩んだこともありました。「父と母が猛反対を押し切るほど望んで生まれた」ことよりも、「周りが生まれてほしいと思わなかった」ことのほうが、当時のわたしの心に重くのしかかっていました。そして今思えば、幼いころからの自信のなさは、そんな自己否定感に端を発していたのかもしれません。

でも、そんなわたしだったからこそ、「人に褒められる」「お礼を言われる」ことに、いつも心が敏感に反応し、人一倍嬉しく感じるようになっていったように思います。

わたしを妊娠しているとき、実家を頼れなかった両親は、近所の人にとてもお世話になったそうです。

「〝遠い親戚より近くの他人〟という言葉の意味を体験できたのは、桃子がお腹にいたおかげだね」などと、小学生のころに両親に何度となくお礼を言われました。そのたびにわたしは嬉しくて、自分の手柄のように「どういたしまして！」と笑顔で返していたのを、今でもよくおぼえています。

褒められる、お礼を言われる、認められる。

その積み重ねは「自己肯定感」に繋がっていくとわたしは思っています。

気がつけば「褒められたいわたし」は「自信をもてないわたし」と相まって、それが何に対してであっても、褒められるようになるまで、自信がもてるようになるまで、何度でも練習を重ねるようになっていました。最初から「自信満々です。落ち度はありません」と言えるようなわたしだったら、あまり努力はしなかったかもしれません。

考え方しだいでは、一見後ろ向きな、〝自信のなさ〟という性格は、前向きな努力を生

む特効薬になるのかもしれません。

話は16年後へと移りますが、芸能界デビューを果たして、「初コンサート」を開いたときのこと。

会場には両親の姿がありました。

ファンの方々の「桃子」「桃子」とわたしの名を呼ぶコールに、出産当時のことを思い出して、涙が止まらなかったそうです。

少しは親孝行できたかな、と思ったわたしでした。

おばあちゃんの魔法の言葉

わたしが小学校に入学するタイミングで、母は仕事に復帰しました。出産や子育てで仕事から長く離れていた母が、再就職を決めたのです。気がかりは、小学生の兄とわたしのこと。留守番に慣れていない子どもたちを心配して、母の実家近くの東京都品川区に引っ越すことになりました。

いちばん喜んでくれたのは、祖母でした。わたしが生まれる前は猛反対し、「わたしが孫を育ててやる!」と言った、あの祖母です。

祖母は、もともと子どもが大好きで、近所の子どもたちからも慕われていました。4つ年上の兄が生まれたときには初孫の誕生を喜び、兄のために自宅の庭を掘って、木で四角く囲いをし、買ってきた砂を流し入れ、兄専用の砂場を作ってしまったほどです。孫を喜ばせるためだったら何でもする、そんなおばあちゃんでした。

小学校にあがったわたしは、学校の帰りに祖母の家に寄ることが多くなりました。兄は友達との遊びに夢中でしたが、わたしは祖母と接することのほうが好きでした。両親からは「おばあちゃんは怖くて厳しい人だ」と聞かされていましたが、わたしは怖いと感じたことは一度もありませんでした。

そんな「マサ子おばあちゃん」が亡くなるまで、ずっとわたしに投げかけてくれた〝魔法の言葉〟があります。そのエピソードを、感謝を込めて、ここに書いておきたいと思います。

「桃子は良くなってきたね」
「桃子、前より良くなってきた」
これがマサ子おばあちゃんの魔法の言葉です。

学校の宿題をおばあちゃんの家でやっていると、笑顔で静かにこう言います。
「桃子の書く字はキレイになってきたねぇ、すごく良くなってきたよ、もっと頑張ったらみんな驚くわね」

褒められると単純に嬉しかったです。この褒め方が素晴らしいのは「まだ良くなる可能性」を示唆していて、完成形で褒められているわけではないところです。「前より良くなってきた」けれど、今後の成長の余地も感じさせてくれる深い言葉なのです。そして、また褒めてもらおうとヤル気にさせるのです。

習っていたピアノを聴いてもらっても、同じように微笑みながらこう言います。

「桃子の指が早く動くようになって、前よりもずっといい。どんどん良くなってきているね。次はもっと早くなるのかね」

モダンバレエのお稽古も始めました。マサ子おばあちゃんの前で、覚えたポーズを自慢げに見せるわたし。

「わぁー、良くなってきた。前より良くなってきた」

何をやっても同じように褒めてくれる祖母の言葉に、小学校低学年のわたしは何の疑問も抱きませんでした。祖母は、人を伸ばすように意識して褒めていたのか？　それとも、単なる口ぐせのようなものだったのか？　いずれにしても、わたしを意欲的にしてくれたのは確かです。

小学生のころは、学校での成績も自慢するほどではありませんでした。どの科目もなんとか80点は取れるのですが、満点は絶対に取れない子。それでも親は「自慢の子」と言ってくれましたが、わたしは100点をラクラク取れる友達に憧れていました。

そんなとき、困ったことが起こりました。

国語のテストの文章問題につまずき、30点台の答案用紙が返却されたのです。サザエさんのカツオくんや、ドラえもんののび太くんなら、親に見せずに隠してしまいそうな答案用紙。隠すことすらもできないわたしは、自分の家ではなく、おばあちゃんの家に持っていきました。

さすがに今日は、「良くなってきた」の言葉は出てこないはずです。

「桃子、良くなってきたね」

「えっ？」

「気づいていないかい？　桃子はテストに慣れてきて緊張しなくなったんだよ」

「緊張しなくなった……」

「そう。慣れてきて、緊張しなくなったころに、人は注意不足から今回のような平凡な失

敗をするもんだ。でも、緊張がとけてきたのはいいことだよ。テストや試験のときに、緊張は邪魔だからね。緊張しすぎて頭が真っ白になって、何も書けなくなっちゃう人もいるだろう?」

「うん……」

「だから、緊張しなくなった自分をまずは褒めようね」

わたしは、答案用紙の裏の少女マンガ風のイタズラがきが気になりました。テストがお手上げで、途中からかいていた落書き。恥ずかしくて、おばあちゃんに気づいてほしくないと思っていました。

マサ子おばあちゃんは、大きな答案用紙を2つにたたみました。そして、わたしのイタズラがきを見つけると、感心したように何度かうなずいてから、こう言ったのです。

「桃子、絵もうまくなってきたね」

マサ子おばあちゃんには、わたしと兄を含めると、5人の孫がいます。

5人は、同じように祖母から「良くなってきた」と言われて育ちました。

幼いころは、マサ子おばあちゃんの口ぐせだと、みんなが集まるたびに笑っていました

が、「今が最高だ。これで十分だ。満点だ」と褒められなくてよかったと思っています。

成長の余地を言葉に含んでくれたことは、47歳になった今も、自分を褒めすぎない工夫となっています。

おばあちゃん、わたしはまだ魔法にかかったままのようです。

学級委員のバッジ

小学校では、4年生から委員会活動が始まります。保健委員、図書委員、放送委員、環境美化委員……なかでも花形と呼ばれたのが「学級委員」でした。学級委員には毎年、成績優秀でスポーツ万能な生徒が選ばれる傾向があり、そんな先輩たちに低学年が憧れるのです。

ほかの委員は立候補で決めますが、「学級委員」だけは特別で、クラス投票というかたちをとっていました。初めて経験するクラス投票。選挙権を得た大人のような気持ちになりドキドキしたことを覚えています。

男女1名ずつの名前を書いて投票箱に入れるシステムです。先生から、推薦する人の名前を間違えて書かないようにと指示があり、余計に緊張したものです。

わたしは、明るくて活発な仲良しのアコちゃんという女の子の名前と、クラスのリーダー的な高橋君の名前を書いて投票箱に入れました。投票が終わると、先生が自らの机の上

で1枚ずつ開票していきます。すると……。

「1枚目は、菊池桃子さん」

黒板に「菊池」という名前が書かれ、〝正〟の字の一画目が記されました。

「何かの間違いだ……」

わたしの頭のなかは混乱状態です。

つい半年前の学芸会では、主役はもとより主要キャストにも選ばれませんでした。わたしがいただいた役は、「トビウオ1(いち)」。トビウオ1からトビウオ5までいるなかの一人で、セリフも一言だけのチョイ役です。

それまでも学芸会では、目立った役に指名されたことは一度もありません。幼稚園年少の学芸会では、わたしが演じたのは「花売りの少女たち」のなかの一人。年長クラスでは、「白鳥の王子たち」というなかの〝王子たち〟の一人。しかも背が高いという理由で、男の子に交ざっての役です。キレイな衣装が着たいと思い始める年齢にもかかわらず、王子たちには少々傷つきました。小学校では、ハーモニカ隊の一員。舞台に上がらない美術担当も経験しました。

幼稚園のころから、主役や主要キャストになるのは、何につけてもわたしよりも優秀な

子。憧れはするものの、自分がその立場になるなんて、考えたこともありませんでした。

わたしにスポットライトが当たることはなかったのです。でもそれらは、「自分に自信を持てなかったわたし」にはピッタリの場所で、かえって落ち着いていろいろなことに取り組んでこられたように思います。

皆さんは、いかがですか?

突然の指名などに、自分はそんな器ではない！とあわてたことはありませんか?

驚いたことに、学級委員の投票は、ついに菊池桃子が女子では最多得票数となり、まぶしい学級委員のバッジを受け取って茫然としたまま帰宅しました。

「何とかなる。大丈夫だ」

その夜の食卓で、まるで自分に言い聞かせるように父が言いました。

「わぁ、大変なことになっちゃったのね……」

わたしと同じように困り顔をして、母は戸惑っていました。

「おまえ、大丈夫なのか？」

中学2年の兄も、わたしの実力を不安視していました。

なんと気の小さな一家なのでしょう。

そのころはまだ携帯電話も、もちろん携帯でのメールもありませんでしたので、仕事から帰ってきた母に驚きの結果を話したところ、母は心配のあまり、夕飯の食材を買いにいくのを忘れていました。いろいろなことが手につかなくなった様子で、「今日は、お蕎麦屋さんから天丼をとって夕食に」と、家族分の天丼を注文するありさまでした。

こんなに心配性で、〝娘への評価の低い〟両親が、数年後に芸能界のスカウトを承諾したなんてとても信じられません。

次の日、仲良しの友達に「何故わたしが選ばれたのだろう？」と聞いてみました。返ってきた答えは、「真面目だから」「人に強くあたらない」「約束を守ってくれる」「いつもハンカチとティッシュを持っている」「目立ちたがり屋じゃないところがいい」というもの。イマイチ冴えませんが、わたしの良いところを探してくれていたことがわかりました。際立つ才能がなくても、日ごろの行いの積み重ねを評価されることってあるのですね。照れ

くさくて嬉しかったです。

数日後、友達のアコちゃんの家に招かれました。アコちゃんの家には、2階の屋根の上に、改築して作ったバルコニーがありました。そこから眺める風景が大好きだったアコちゃんは、友達にも見せてあげたいといつもお母さんに言っていたそうです。ただ、増築したバルコニーは大人からすると不安定で、大人の言いつけをちゃんと守れる友達ならいいということになり、アコちゃんのお母さんがわたしに声をかけてくれたのです。

「お邪魔します！」

元気に挨拶をしました。アコちゃんの家は婦人服店を営んでいて、売り場を通り抜けて生活スペースに入っていきます。江戸っ子が使う歯切れのいい言葉づかいが印象的なアコちゃんのお母さんが言いました。

「桃ちゃん、学級委員に選ばれたんだって？　すごいね！　今度、学校の帰りにおばさんにバッジを見せてね。あのバッジはね、大人から見ても格好いいんだよ」

「はい、ありがとうございます！」

「おばさんは、桃ちゃんがいい子だって前から知っていたけれど、バッジを見たら、桃ちゃんのことを知らない人も注目するようになるからね」

そう言って、アコちゃんのお母さんは心配そうに語りかけました。わたしは、言葉の意味がつかみきれませんでした。

「気をつけてねって、言ってるのよ。人の目を気にしなさいね、今まで以上に。みんなから見られる人は、行いに気をつけないとダメなんだよ」

バルコニーに上がる前に、危ないことをしないように注意する意味だったのかもしれませんが、この言葉は、のちにわたしが芸能界に入ることを予言していたようにも思えるのです。

実際に芸能界に入ってからは、周囲から見られているという意識のもとで気をつけることがいっぱいです。今でも、アコちゃんのお母さんの言葉が、頭をよぎることがあります。

わたしの学級委員は4年生、5年生、6年生と続きました。幼いながらも期待に応えよう、信頼を裏切らないようにしよう、といつも心がけているような子どもでした。

禁止命令！

母親となった今、自分の子どもたちと同じ年の自分を思い出すのは、照れくさい気持ちになります。今の息子や娘より、わたしが子どものころのほうが考え方が幼くて、単純だったように思うからです。

あのころのことは、もう随分前のことなのに、はっきりと記憶が蘇るから不思議ですね。

１９８１年の春、学区域の公立中学に入学したわたしは、憧れのセーラー服に袖を通しました。

まだ背が伸びそうだということで少し大きめのセーラー服を買ってもらい、袖が長くてうっとうしかったことも、今振り返ると良い思い出です。

小学校が同じだった友人や先輩も多く、心細い思いはありませんでした。小学生時代にはなかった英語の授業や、算数から数学へと呼び名を変える授業が始まったのも楽しくて。

オシャレにも目覚めました。小学生のころは、髪形も母親まかせでしたが、「少し伸ばしてみたいなぁ、風になびくぐらいに」などと考えるようになったのです。

そんな新入生一同に、部活動の一覧表が配られました。

わたしは、この中学の卒業生で高校2年になっていた兄に、部活動についてはあらかじめ聞いていたので、説明会を待たずに、兄と同じ「軟式テニス部」に入りたいと心に決めていました。その兄は高校生になってアメリカンフットボール部に入部。使わなくなった2本のラケットはわたしが使ってもいいと言ってくれていました。

中学生ともなれば、部活動の説明会でも、小学生に話すような幼い言葉を先生たちは使いません。しっかり大人扱いされた言葉で話が進んでいきます。それが、わたしたちを一気に成長させてくれるように感じました。

放課後、実際の部活動を見学するため、校庭に向かいました。上級生は背が高くて、高校生や大学生を見ているような錯覚に陥りました。

この時期、早く背が伸びた男子たちは、女子からの人気が高くてモテモテだったように思います。軟式テニス部の先輩たちには、そんな背の高い男子が何人もいました。そのな

かの一人が、見学するわたしに話しかけてきました。
「見学者一覧の用紙に、学年とクラスと名前を書いてください」
そう言うと、用紙付きの画板とボールペンを差し出しました。
胸のドキドキがおさまりません。同級生の男子にくらべると格段の差。とても紳士的に見えたのです。すぐに名前を書いて、わたしは先輩たちの準備運動を憧れの眼差しで眺めていました。
わたしと同じように見学していた同学年の女子たちが、小声で話しかけてきました。
「ねぇ、入る?」
聞かれたわたしは、
「うん。……入る」
「えっ、ほかの部活は見ないの?」
「いいの。お兄ちゃんがテニスをやっていたから、ラケットをもらったの」
「お兄ちゃんって、この中学?」
「うん。でも、もう高校生。だからここの卒業生」
「じゃあ、妹ですって先生に言ったら?」

「そうだね、でも、お兄ちゃんのころと同じ先生かなぁ?」

顧問の先生を見ると手招きされたので、わたしたち1年生は先生のところに走り寄りました。

仮入部の用紙をいただき、いろいろとお話しするなかで「卒業した菊池の妹です」と言うと、「君が桃子なのか」と歓迎してくれました。兄から、妹は「桃子」という少し変わった名前だと聞かされていたそうです。歓迎されたこともあり、わたしは嬉々としていました。

家に帰ると、早速、母に仮入部のサインと印鑑をもらい、翌日からは練習にも参加していました。

それから1週間が過ぎた頃、事態が一変したのです。

「桃子、部活はやめなさい!」

しばらく出張で留守にしていた父が、帰宅するなり怒りだしたのです。

「今は春だから日没も遅いけど、秋を過ぎたら学校を出るころはもう真っ暗だ。女の子が暗い道を帰ってくるのは危なくて、父さんは許せない」

「何を言ってるの？　イヤよ。もう入っているもん。お母さんもいいって言ったもん！」
母はしっかりとわたしを見つめて、こう言いました。
「じつは母さんもね、お父さんに賛成なの」
「えーっ!?」
「よく考えたら、お兄ちゃんとは違うのよ。桃子は女の子だから暗くなる前に帰ってほしいの。クラブ活動をするとなると、学校を出るのが5時半。うちはいちばん遠くから通う地域だから、帰りは6時になる。6時はね、まだ中学生にはダメ。駅の裏には『不審者に注意』っていう看板もあるでしょう？」
先週、仮入部用紙にサインをしてくれた母は何だったのでしょう。
不満で胸が爆発しそうになりました。
「今さら、やめるなんて言えないよ。お兄ちゃんだけテニスができるなんて不公平！　ほかの家はいいのに、うちはダメなんてありえない！」
「……心配なの」
と母。
「とにかくダメだから。断る理由は、親が言っていることをそのまま言えばいい」

きっぱりと言い切る父。
わたしは諦めきれません。
「じゃあ、何歳になったら暗い時間の帰宅が許されるのよ‼」
わたしは今までに出したことのないような大声で言い返しました。
「大学生だ！」
と、これまた遠い先を言う父。
親を驚かせようと頑張って大声で言ったのですが、父の反応は変わりませんでした。
母は「大人になればわかる、桃子もお母さんになればわかることだ」と。それは、当時のわたしの年齢では、まったく納得のいかないことでした。大人の言うことには黙って従いなさいという意味にも受け取れました。
今の年齢になって考えると、幼くても、若くても、大人であっても〝真っすぐ伝えてくる〟主張には、それぞれの立場から考えられた大切な意味があって、「どちらが間違えている」ということではないように思います。議論のなかで、どちらの考えを優先させるべきなのかは、状況を踏まえて、冷静に判断する必要があると思います。
もちろん、明らかに間違った主張もあるでしょう。しかし、子どもや若者の言葉だから

と、はなから否定するのは違うと思うのです。ただこの場合は、父も母も、わたしの気持ちを理解したうえで、親の判断を優先させたのだ、とは思えました。

部活の件は、このまま粘っても、逆にわたしが叱られる流れになることは明らかでした。結局、軟式テニス部はあきらめることになったのです。

あとは泣くしかありませんでした。

大学生ならOKということは、高校でも部活禁止ということです。暗い夜道は怪しい人が通るかもしれないなんて、うちの親は怖いテレビドラマの見すぎだと思いました。そして、わたしだって気をつけることくらい知っているのに……と。

これ以降、わたしは俗にいう「反抗期」に入っていった自覚があります。

父とはなるべく会話をしたくないし、母とも少し距離を置くようになりました。そして、反抗している自分に気づいて、少し困ってほしいなんて意地悪なことも考えていました。

そんなわたしが、二十数年後に、自分の子どもたちの反抗期と向き合うことになろうとは。

わたし自身が「少し困ってほしい」なんて意地悪な顔をされるようになるなんて、このときは思いもしませんでした。



デビュー時の宣伝用写真

第二章　デビュー

運命を変えた記念写真

中学2年の冬。わたしは一人で地下鉄日比谷線の六本木駅から自宅に帰る電車に揺られていました。

30年以上前ですから、スマートフォンで乗り継ぎが簡単に調べられる時代ではありません。折りたたむと名刺サイズになる都内の路線図を見ながら、乗り換えの駅を間違えないよう、通過する駅をひと駅ずつ慎重に確認し、緊張しながら電車に乗っていました。

乗り換えのために恵比寿駅に着くと、外はすっかり暗くなっています。あれほど、親から禁止されていた夜の街を、なぜわたしは歩いていたのでしょう?

じつは、その年の5月に芸能事務所からスカウトされ、レッスンに通うようになったのです。木曜日はお芝居の稽古で、土曜日は歌のレッスン。この日は師走で、年内最後の歌のレッスンがありました。六本木にあった先生のお宅から自宅までは、電車を使って1時

間ほどの距離でした。

突然の転機って、本当にあるのですね。小説や映画のような、劇的なこと。スカウトされたのは、14歳になってまもなくのころでした。初めて書きますが、スカウトされたのは、兄とわたしの、兄妹揃ってでした。現在、中年太りした兄の姿を知る方々には想像もできないと思いますが、なかなかのイケメンだと思われたらしく、「アイドルになりませんか？」と声をかけられました。

あのころ、母方の叔母が東京・青山で小さな飲食店を営んでいました。

わたしの両親は北海道の出身で、親戚のほとんどは北海道に暮らしています。そんななか、東京に出てきていた叔母とは〝同じ東京に来たもの同士〟という親近感からか、わたしたち家族はとても仲良くしていたのです。

その叔母の誕生日に、お店で開かれたバースデーパーティー。楽しい祝いの席でたくさんの記念写真を撮りました。

その〝記念写真〟が、わたしの運命を変えたのです。

叔母は、店のレジの横にしばらく記念写真を飾っていました。するとある日、店のお客

さんに聞かれました。
「この子たちはどちらのお子さんですか？」
「わたしの従妹の子どもたちですよ」
「ぜひ、一度会わせてもらえませんか？」
名刺を受け取ると芸能事務所の方で、新人候補を探しているということでした。突然の申し出に驚いた叔母は、すぐにわたしたちの家にやってきました。

叔母の話を聞いた父は、「騙されているに違いない！」と怒っていました。
「芸能人というのは、ごくごく選ばれた人だけがなれるんだ。うちの子たちはとくに目立つタイプでもないし、からかわれているのか、あるいはレッスン料などといってお金を騙し取られるんだろう！」
危険が我が家に迫ってきた！　そう言わんばかりに顔を真っ赤にしています。
「あなたたちは、どうなの？　やってみたいの？」
叔母が聞いてくれましたが、わたしも兄も、そんな父の前では何も言えませんでした。

突然のスカウト話に憤慨し、顔を真っ赤にしていた父は、すでに他界しています。突然の病に倒れ、60歳という若さで亡くなりました。

父が生きていたら、当時のことを詳しく聞いてみたいところですが、わたしが取材を受けるときも、「お父さんのことはしゃべるなよ」なんて言うぐらいでしたから、存命でも話してくれなかったかもしれませんね。

あのときとても反対していた父は、その後、いろいろな方の意見を聞いて回ったようで、芸能界に少し興味が出てきたように思います。

「とりあえず、事務所のスタッフの方がスナップ写真を撮らせてくれと言っているから、二人で行ってきなさい」と父が言いだしました。

「えっ？」

兄妹揃って、びっくりです。

どうやら叔母が、芸能界に詳しいお客さんたちに、この事務所に変な噂はないか、聞き取り調査をしてくれていたようなのです。

なかなか評判のいい事務所だと知った父は、わたしと兄が知らないうちに、事務所の人

と何度も直接話をしていたようでした。

「まだ本格的な話にはなっていないらしい。写真を撮って、使いものになるかどうか二次審査がしたいそうだ。お父さんな、せっかくのチャンスを頭ごなしに反対するな！　ってみんなに説教されたんだよ。だから、おまえたちがやりたいなら写真を撮ってもらってきていいんだぞ」

そう父が言うと、

「オレは行かない。やりたくないし、向いていない」

兄は、ハッキリとした口調で即答しました。

「桃子は？」

その瞬間、心の中で「えっ、自分で決めていいの？」と舞い上がりました。

1年前、クラブ活動さえ危ないと反対し、ほかの家より門限も早く厳しい両親がこんなことを言うなんて。これを断ったら、大人になるまでもうチャンスはないぞ！　そう思ったわたしは、「行ってみようかな……」と、口にしました。

「本当にちゃんと考えたの？」と、母は心配そうな表情でした。

「きっと二次審査で落ちると思うし……。写真だけ撮ってもらってこようかな」

このときのわたしの動機は単純で、厳しすぎる親に「冒険させてよ」と思っていたのです。

二次審査も無事通過し、デビューに向けて忙しい日々がやってきました。

あんなに怖い顔をしていた父も、

「もしもだぞ、桃子がオレの憧れの長嶋茂雄さんに会えたりしたら、父さん嬉しいなぁ」

などと言いながら応援してくれるようになったのでした。

さて、話が唐突にそれますが、皆さんに質問です。

皆さんは、わたしのように誘われたらどうしますか？

当時は親の庇護下にある14歳でしたから、最初から親の判断に委ねていましたが、今のわたしなら、こんなふうに考えます。

〝メリット〟と〝デメリット〟をそれぞれ紙の上に書いていくのです。

自分自身のこと、家族のこと、金銭的なこと、仕事上のことなど、思いつくすべてのことのなかからメリットとデメリットを探します。

紙の上に書いたものを落ち着いて眺めていくと、双方のポイントが冷静に見られるようになってきます。さらにもっと考えていくと、〝デメリット〟は工夫次第でリストから消せることに気づいたりします。頭の中で考えてパンクしそうになるときには、ぜひオススメの方法です。

そんなわけで、人生の流れが突然、予想だにしなかった方向に変わり、わたしは、学業と並行しながらですが、周りの同級生よりも早く、社会に出ることになりました。

このとき、人生の轍において、選ぶ道は2つありました。「あのとき、こちらの道に進んでよかった」と思えるように、努力を続けなくてはいけません。

〝轍〟は、人生を終えるその日まで、一本の線で繋がっているのですから。

デビュー

写真の撮影や仮歌レコーディングなど、これまでに経験したことのない、さまざまなことが、デビューする前から行われました。
カメラテストで、モニターに映った自分を初めて見たとき、それはそれは衝撃を受けたことを今でも鮮明に覚えています。同じような経験をした人もいらっしゃるかもしれませんが、想像していた自分と、実際の自分はまるで違っていました。
今は動画撮影が一般的になり、小さいころから動画で撮影された自分の姿を見慣れているかもしれませんが、わたしは15歳のときが初体験。モニターで、初めて立体的な自分を見たときは、思っていたよりもずっと平べったく、胸ももっと出ているはずがぺったんこ。鼻ももっと高いと思っていたのが横から映ると低かったし、後頭部はいい感じにふっくらしているだろうと想像していたのに、これほど絶壁だとは思ってもいませんでした。
自分の太さも、体形も、思っていた自分とはまるで違っていて、心の底からがっかりし

たのです。車の運転免許証を取得するときに、サイドミラーやバックミラーでは確認できない「死角」の話をされますが、まさに自分の死角を見たようでした。

それも、「構造的に絶対に自分では見ることのできない死角」と、「自分で意識的に見ようとしなかった死角」の両方。鏡を覗き込むときは、たぶん自分がいちばん好きな、いちばんよく見える角度で止めて見ているのだろうなと思います。

思い込みの心理というか、こうであってほしいと自分を美化していたのでしょうか。自分の声の「がっかり度」は共感してくれる方も多いのですが、画面に映ったときのことは一人で落ち込みました。自分のいいところが探せないのです。

自信など持てぬままに、デビューの準備はどんどん具体的になっていきました。

高校も、芸能活動が許されている3つの候補校のなかから検討しました。当時住んでいた自宅からの通学距離などを考慮して、当時は女子校だった日出女子学園高等学校（現在は共学の日出高等学校）に決めました。

デビューした後は、もう甘えたことなど言えなくなっていました。

関わってくださるすべての方々が真剣で、必死でした。そして、今振り返ってみても、

アイドル時代は仕事と学業の両立で多忙をきわめ、記憶も断片的にしか思い出せません。嵐が通り過ぎるような勢いで時間が過ぎていきました。

でも、何より〝自分に自信のなかった〟わたしを応援してくださっているファンの方々が、人生で初めてわたしに〝自信〟を与えてくれたと思っています。

その気持ちを受け取ると、「自分が嫌いなわたし」なんて卒業しよう！　そんな勇気が湧いてきたものです。

このころのわたしは、ネガティブな自分を変えていこうとか、将来のこととか、思春期特有の悩んでいることなど、そんな話ができる相手が欲しくなっていました。

しかし、周りを見ればそばにいるのは大人ばかりで、そういう話をしても、周りのスタッフにとってみれば「貴重な仕事中に雑談はいらない。そんなおしゃべりをする時間があるなら、仕事を進めてほしい」という感じでした。

「今は仕事中だからね。そういう話はあとでしなさい」

そんなふうに注意されたりもしました。

仕事とはそれだけ厳しいものなのかもしれない、自分の悩みは自分の胸だけにとどめよ

うと思っていました。
そんなとき、わたしを快く受け入れてくれたのが、高校のクラスメイトたちでした。芸能活動をしているわたしでしたが、腫れ物に触るような態度は一切なく、彼女たちと交わした何げない会話や、口は悪くても、優しい言葉の数々が、わたしには宝物だったのです。
わたしは、事務所にお願いしました。この同級生と過ごす時間が心の安定剤のようなもので、この時間が大切なこと。そしてこの友人たちと誠実に付き合っていくためには、授業が終わったらすぐに仕事に向かうのではなく、掃除当番を終えるまで待ってほしいと。
みんなが掃除をしているのに、「仕事があるから、お先に」と言って帰れません。
どうでもいいこだわりのようですが、面倒な掃除当番だからこそ一緒に行うことが、友人たちとの関係を保つうえで大切なことなのだと思っていました。
いつも掃除が終わって、校舎の裏のゴミ捨て場にゴミを運んでから、そこで彼女たちとは別れていました。
「じゃあ、バイトに行ってくるね、また明日！」
「彼氏と会うんだ。明日ね！」

「今日はコミック本の発売日だから買って帰るんだ。またね！」

わたしも、

「今日は、歌番組のあとにラジオの収録があるんだ。また明日ね！」

変に気を使われたりすることのない、普通の友達同士という関係でした。

だからこそ、どんなに眠くても学校に行きたかったし、約束をしなくても友達と会える「学校」という場所が大好きでした。そして、高校を卒業した後も、自分にはこんな友達が必要なんだと、短期大学への進学を考えました。

デビューしてから多忙をきわめ、大人社会から逃げ出したくなったときにわたしを陰で支えてくれたのは、いつも彼女たちでした。彼女たちへの感謝の気持ちは、これからもずっと忘れないと思います。そしてファンの方々からの声援や、事務所のスタッフの気遣いがあったからこそ頑張れていたことがたくさんあります。大人になった今だから、あらためてお礼が言えるのですね。

スタジオから逃げ出す

アイドル時代の思い出で、今でも夢に見て冷や汗をかいて起きたり、泣きながら目覚める場面があります。

それはレコーディングスタジオの風景です。

わたしは、怒られてばかりいました。当時の音楽プロデューサーからは「できないヤツはいらない！」とか、「本気でやっているのか！」と叱咤されたり、「こんなふうに歌ってみろ」と言われたとおりに再現できないと、机をひっくり返さんばかりの勢いで怒られたのです。

「今日は桃子の調子が悪いから、中止にしようか？」

新曲の発売日はすでに決まっていて、何がなんでも発売中止や延期はできないことが、レコーディングスタジオにいるスタッフ全員のこわばった表情からもうかがえました。

「とりあえず、小休憩！」
そう言われても、どうしたらいいかわからなかったわたしは、マネジャーに、
「一人で外の空気を吸ってきます」
と言い、外に出してもらいました。

ずっと泣いていたので、すれ違う人に泣き顔を見られるのが嫌で、顔をあげず、下を見ながら歩きました。東京タワーの近くにあるスタジオを出て坂を下り、歩き続けていると、気づいたときには公園に来ていました。「スタジオに戻りたくないな……」と途方に暮れていたとき、男の人に声をかけられました。
顔をあげると、制服を着た警官です。
確か高校の制服のまま、しゃくりあげながら歩いていたので、変な犯罪に巻き込まれたのではないかと心配したようでした。
「何かあったの？　女性の警官を呼んだほうがいい？」
「いいえ、大丈夫です。仕事がうまくいかなくて、叱られたんです」
その後、スタジオにいるマネジャーに連絡がいったり、自宅にも連絡がいったりしまし

たが、警察としては「状況が状況なので、保護者の方にしか引き渡せません」ということで、わたしは親が迎えにくるまで、交番にかくまわれてしまったのです。

少しでいいから、わたしのいいところを認めて褒めてほしい、そう思っていました。それだけで頑張っていけるのに……と。

親に相談できないことも、毎日を苦しくしていたと思います。

なにしろ、子どものころから一度始めたことを途中でやめるなんて、そんなワガママは許さん！という家でしたから。

叱られたり、言われたことができなかったりしたときは、悔しくて情けなくて、もうやめてしまおうかと思ったこともありました。

それでも「やめたい」と言いださなかったのは「もうすでに走りだしてしまっているから」というとてもシンプルな理由でした。

ありがたいことに1年先までのスケジュールはだいたい決まっていましたから、今さら辞めるなんて言えません。厳しく育てられたおかげで、高校生なりに責任感は持っていたのです。

若いころは、できないことばっかりで、自分を責めたり、反省したり、不甲斐なさに涙したこともありましたが、今、自分の歩んできた道を振り返ると、途中で投げ出さないこと、やり続けることを徹底的に教えてくれた両親に感謝しています。

わたしは親になって、そのことをより一層強く感じるようになりました。

生きていれば、どんなことでも、いいときと悪いときがあります。

将来、子どもたちが働くようになったときに、辛いときでも、仕事に楽しみを見いだせる強さや明るさを持ってほしいし、責任を持って仕事をしていくことの大変さと喜びを体験してほしいのです。

辛くて悲しくて、スタジオを飛び出して泣きじゃくった東京タワーのふもとの公園。

某テレビ番組の収録で思い出をたどりながら、あのときのレコーディングスタジオを訪れると、できるだけ遠くまで逃げてしまおうと速足で歩き、警察に保護されたその場所は、スタジオをぐるっと一周して、わずか数十メートルしか離れていませんでした。

しょせん、逃げられるわけはなかったのですね。

普通の感覚

戸板女子短期大学に進むと、美術専攻のわたしは「平面デザイン、立体造形、色彩学」などを学んでいました。

美術を選んだのには理由がありました。芸能活動の、たとえば衣装やジャケットデザインなどを自分でできるようになりたいという夢です。

短大でも授業が終わると、高校時代と同じように仕事場に向かいました。

そんな日々の、友人たちとの会話に変化が表れ始めました。

「リクルートスーツ、どこで買う?」

「今週は企業の説明会があるんだ」

就職活動の話題です。短大では学生である期間は2年間しかないため、翌年には就職活動が始まります。わたしは迷うことなく、今の仕事を続けていこうと思っていましたが、心配なことが一つだけありました。

それは、「芸能界のことしか知らない、常識ハズレな自分になってしまうのでは」という不安です。

わたしは平凡なサラリーマンの家庭で育ちました。金銭的に窮屈な思いをしたことはありませんでしたが、無駄遣いもしない家庭でした。両親は家を購入するために計画的に貯金をしていましたし、わたしと兄の教育資金も計算して貯蓄してくれていることを、子どものころから知っていました。

年に2回、ボーナスが入るときは、我が家のお祭りでした。

ボーナス祭り（うちではそう呼んでいました）のときには、エアコンや冷蔵庫などの大きな家電製品を買い替えることも多く、近所に住む祖母たちと特別なご馳走を食べに出かけました。とても楽しい想い出です。

ボーナスの季節に、一度だけ〝祭り〟の規模が縮小されたことがありました。わたしのデビューの準備にお金がかかってしまったからです。

デビュー前の新人タレントの衣装は、自分で用意することになっていました。まだ何も

利益をあげていないわけですから、当然といえます。

とはいえ、CMや映画などのオーディションが続くと大変です。あるとき、当時のプロデューサーから、衣装と靴を組み合わせたものを10パターン用意するようにと言われたのです。ごく普通の家庭である我が家にとっては、想定外の大きな出費です。そのプロデューサーは男性でしたので、女性の服の値段を知らないようで（わたしも知りませんでしたが）、なるべく良質なものを用意するようにとのことでした。

母と二人で、二子玉川にあるデパートに10着分の衣装を買いに行きました。

そして、お会計のときに提示された金額は……、なんと30万円でした。

日ごろ、いろいろと工夫して節約しているのを間近で見てきたわたしは、驚いて、「お母さん、ごめんなさい！」と、とっさに謝りました。母は眩しいほどの笑顔で、「いいの、いいの。たまにはドーンと使わせてくださいな。あースッキリする！」と、とても楽しそうに言ったのです。

このとき、「大人になったら、わたしが主催する〝ボーナス祭り〟をやらなくては」と心に誓ったのでした。

どんな仕事に就いても、その業界特有の常識や感覚がありますよね。たとえば、時間の感覚であったり、金銭感覚であったり。

それが自分に影響を及ぼし、いつしか少なからず身につき、自分の人格を形成していきます。

将来、自分が母親になったときに、常識ハズレではない、普通の価値観を持っていないと、子どもに正しい教育ができないと思っていました。

わたしは、戸板女子短大を卒業する前から仕事をしていましたので、同級生たちよりも無駄遣いをしようと思えばできたと思います。

そのストッパーの役割をしてくれていたのが、同級生の友人たち。高校のころから芸能界にいながらも、年齢なりの〝普通の感覚〟が維持できていたのは、彼女たちと付き合っていたおかげだと思います。その同級生たちと毎日会わなくなったらどうでしょう。

卒業と同時に世間の感覚とズレていきそうで、心細く感じました。

ですが、ここで自分の意志の強さを褒めてあげたいと思います。

とくに金銭感覚においては、「あえてお金をかけるべきだ」という柔軟さも覚えました

が、47歳になる今も、あのころとさほど変わっていません。時々「ケチ！」とツッコミを入れたくなるほどです。

よくいろんな方に聞かれるのですが、仕事以外の生活の移動手段は、ほとんど電車やバスです。東京で暮らしていると電車やバスの路線が張り巡らされているので便利です。それを使って学生のときは通学していましたし、今でもよく使っています。

自家用車もありますが、買い物で荷物が多そうなときくらいしか使いません。

もちろん、すべての人が、わたしのようなこだわりを持つ必要はないと思いますが、ただ、子どもを育てたり、人を教育する立場にあることを考えると、一般的な感覚を失わないほうが、子どもとの距離がぐんと縮まると思うのです。

「○○駅、路線が拡張されて、乗り換えが難しくなったよね」

「○○駅の上り階段はキツイよね」

「この時間に○○線に乗ってきたなんて、混んでいて疲れたでしょ？」

こんな感覚を持ち続けることが、わたしのこだわりなのです。



長男をおんぶして

第三章　妻として、母として

結婚してよかった、離婚してよかった

結婚をしたのは、26歳のときでした。

仕事を始めて、約10年。おかげさまで忙しい日々が続き、学業も継続していましたので、それまで、結婚するタイミングについて具体的に考えたことはありませんでした。

漠然と「いつかするだろうな」とは思っていましたし、子どもも「産むだろうな」とは思っていました。ですが、それは具体的に思い描く未来というよりも、親を見て、「わたしもきっとこんなふうになるのかな」と、何となく想像していただけのような気がします。

20歳で短大を卒業した翌年には、同級生から結婚式の招待状が多く届きました。つまり彼女たちは21歳で結婚したということです。当時のわたしにはあまりピンときませんでしたが、みんながそうなら、わたしもそんなに遠い将来のことではないのかもしれないなぁ、なんてボンヤリと考えていました。

現在では、こんなことを口にしたらエイジハラスメントやセクハラ、モラハラ……と、あらゆるハラスメントに該当するのでしょうけれど、当時は女性のことを、12月25日を過ぎると売れ残ってしまうクリスマスケーキにたとえて「25を過ぎたらもらい手がない」なんて言っていた時代です。

企業には「寿退社」なんていう言葉もあり、女性は結婚したら仕事を辞めることが暗黙の了解になっていました。そういえば、「25を過ぎたら」も「寿退社」も、今ではすっかり聞かなくなりました。

元夫と出会ったのは、わたしが25歳になる2日前でした。

スポーツをやっている人でしたが、わたしの勝手なイメージなのか、体育会系の男性は総じて気持ちのよい挨拶をするように思います。しかも、大きな声でハッキリと。

スポーツを通して鍛えられたものなのか、家庭での教育なのかはわかりませんが、わたしは気持ちのよい体育会系の挨拶がずっと好きでした。

それがとくに印象的だった男性と、わたしは結婚を決めたのです。

出会いはテレビ番組の企画で、それは一緒にゴルフをラウンドするというものでした。

「はじめまして。本日、ご一緒させていただきます。僕は男なので、女性のことは気づかないことが多いかもしれません。たとえば、歩くスピードが速すぎたりとか。何かあったら遠慮なく言ってください」
そんな挨拶を最初に交わしたのを覚えています。
それが、同年代の男性でしたので、体育会系の方は気持ちのいい挨拶をしてくださるなぁと思ったものです。
途中でお昼をはさんだときも、「お先にいただきます！」とか、「ごちそうさまでした！」と、元気な挨拶をしていたのがとても好印象でした。
また、先輩や後輩への気遣いも言葉に表していて、わたしの周りでは見かけないタイプで、すごく新鮮でした。

結婚は、もう少し遅くてもよかったかなとも思いましたが、スポーツ選手の方々は奥さんのサポートが必要なのか、早く結婚する方が多いように思います。
そのせいか、お付き合いを始めるときに「年齢的にお付き合いをしたら結婚を考えますけど、いいですか？」と言われました。

「結婚を考えられないのだったら、断ってほしい」とも。
お付き合いが始まるとすぐに、わたしの実家に挨拶に来てくれました。
父はすでに他界していましたから、母と兄に会いにいくと言われて驚きましたが、わたしは実家で暮らしていましたので、誰と出かけているかをあいまいにするよりも、またこの先のことを考えると、会ってもらったほうがいいなと思いました。

わたしは「結婚によって、彼を救ってあげられる」と思い、自分の力を過信していたところがあるように思います。
父親に育てられ、「家庭というものに憧れている」ということをよく口にしていた彼を、「わたし自身が母親の代わりになって、母親と過ごしてこられなかった過去の時間を埋めてあげたい」と思っていました。
『体にアレルギー反応が出るのは、外食続きの生活が影響しているのかもしれない』と聞けば、どんなに忙しくても、家で食事を作って治してあげたいと思いました。
初めて出した料理は、ハンバーグでした。お店のものではないハンバーグを、生まれて初めて食べたと言われ、「っていうか、ハンバーグって家で作れるんだ」と驚いていました。

そんな一つ一つのことが、たぶん母性のようなものだったと思うのですが、わたしの精いっぱいの愛情で包んで、守ってあげたい、助けてあげたい、悲しい思い出を消してあげたいという気持ちから生じたのです。

ですが、そんな自分を今は少し恥ずかしく思い返しています。

同じ目線に立っていたのではなく、今の言葉で言うと「上から目線」だったのかな、とも思います。

わたしは、約束をしたら自分から破ることはしない人間です。

子どもを産み育てる決意をしたら、命がある限り守っていこうと思いますし、添い遂げる約束をしたら、どんなことがあっても最後まで貫こうとするタイプです。ですが、結婚生活は一人では続けることができません。

「すみません、続けたかったけれど、ダメでした」。そう相手から言われてしまっては、どんなことを言っても無理なのです。出会いから19年、結婚生活17年めのことでした。

ときどき、離婚したことを人生の失敗と思い、かつて結婚していたことを、暗い過去の

ように感じている方がいます。
わたしは、そういった考えはいっさいしません。
わたしは、今の自分がいる環境を「悪くないな」と思えるからです。
そして、きっとわたしには必要な経験だったのだな、とも思えるのです。
「この結婚は失敗だった」と思っていたとすれば、生まれた子どもたちは「失敗から生まれたの？」と思い、とっても傷つくでしょう。
わたしは、むしろ「大正解でした！」と子どもたちには言っています。何といっても、大好きなこの子たちを授かったのですから。
「大正解だった」と胸を張って言い切るわたしを見ると、わたしを心配していた子どもたちは「よかった。それは何より」と安心してくれます。
離婚が自分で下した決断だったとしても、相手が下した決断だったとしても同じです。
ものごとって何でもそうですけど、いくらやっても響かない、伝わらないということはあるのです。時にはあきらめる柔軟さも必要なんだなと、学びました。
もしも、結婚してからの人生、この時間を「失敗しちゃった」とか「ごめんね」という

ようにネガティブに捉えたら、子どもたちと過ごした時間もネガティブなものになると思います。わたしがネガティブに捉えることで、この結婚に関わってくださった方々みんなが、悲しんでしまう。いいことは一つもありません。

でも、たとえば「あの仕事、最悪だったね。でも、わたしはあそこから学んだものがあるよ」とか、「あれのおかげで強くなったよ」とポジティブに捉えていけば、すべては必要だったことになるのではないでしょうか。

たぶん、そんなふうに思っているんだと思います。

幸せもすごくたくさん感じたし、いいときを過ごしたんです。

結婚したこともよかった。

そのおかげで子どもを授かった。

そして、離婚したのもよかった。

それが、作り笑いとかでなくて、心から笑って言えるのです。

離婚した当初、必ずといっていいほど聞かれた質問がありました。

「今後またご結婚される気持ちはありますか？」

わたしの正直な気持ちは、もう十分ですというものです。

女性のなかには常に恋愛していたいタイプの方もいますが、わたしはそういうタイプじゃないんだってつくづく実感しています。

そして、たぶん、強い人なんだと思います。泣いてはいても、結構強いなと自分で思います。自分のことをすぐに否定的に捉えてしまうわたしですが、もしかすると、弱い人は、自分のことを肯定的にしか考えられないのかもしれない、自己否定すること自体、強くなければできないんじゃないかと最近思うようになりました。

長男・ユキが生まれる

結婚して6カ月が過ぎたころ、わたしのお腹に新しい生命が宿ったことを知りました。高齢だった夫の父と顔を会わせるたび、「元気なうちに孫の顔を見せてほしい」と言われていましたし、わたし自身も母親になることを望んでいたので、妊娠したとわかったときには本当に嬉しく思いました。

午前中に病院で診断してもらい、陽が暮れる前に、両家の親や所属事務所に連絡をすませました。地方で仕事をしていた夫とは、夜になってやっと連絡が取れました。

周りの方々みんなから祝福されて、とても幸せな妊娠でした。

夜の9時ごろでしょうか。早めに布団に入ると急に静寂が怖くなりました。

身ごもる前は一人でいても怖さなど感じたことはなかったのですが、「お腹の赤ちゃんはわたしが守らなくては」と思うと、静寂さえ怖くなったのです。

窓の外に感じる風の音、路地裏の猫の鳴き声、すべてが怖いのです。
二重の鍵を再度確かめて、ホームセキュリティーも再確認。ガス栓なども確認したように思います。命を守る責任を感じたとたん、すべてに対して警戒モードになりました。
そして布団に戻ると、涙がボロボロこぼれ落ちたのです。
ありがたいことに、これまで守られる経験はたくさんしてきました。でも、誰かを徹底的に守るということは未経験で、自分で戸惑っていたようです。
「もっと自分に自信をつけてから子どもを欲しいと思うべきだったかな……」
「こんなに気の小さいわたしがお母さんだなんて、赤ちゃんが可哀想だ……」
「やめられるものなら、やめたいな……」
書きながら思い返すと、過去の自分にお説教をしてしまいそうですが、それはそれは情けない、往生際の悪いお母さんだったのです。
しかし数日後には、わたしは笑顔の眩しい別人に生まれ変わっていました。
生まれてくる子に「この人がお母さんでよかった」と思ってもらえる生き方をしなければと猛反省し、決意したのでした。

わたしは自分を諭すように、「強くなれ」「優しくなれ」と何度も繰り返し、まるで呪文のように唱えていました。
人は自分のためよりも「誰かのため」と思ったほうが頑張れるものなのかもしれません。

1996年8月。長男のユキが生まれました。
消毒綿で自分の口をしっかり拭いて、わたしはユキに口づけをしました。
誰がなんと言おうと、ユキのファーストキスの相手はお母さんなのです。
おじいちゃんやおばあちゃんがもうすぐ会いにくると聞き、もしやわたしより先に「チユッ」などと唇を奪われやしないかと心配で。
あれから、もうすぐ20年がたちます。
息子のユキは、健康ですくすくと育ちました。
この健康で病気知らずの息子がいたからこそ、このあとに生まれてくる妹・サユのキャリアの道が障壁だらけであることに気づくのです。

そして、長女・サユが生まれる

わたしが大学院で学び直したいと思ったいちばんの理由は、障がいのある長女・サユの人生を守るためでした。とくに社会に出ること、〝自立〟までのサポートをするために、親として学びたいことがいっぱいありました。

そしてその思いは、だんだんと変化していきます。我が家の悩みの解決だけを目的に始めた勉強でしたが、今では、同じように悩む方々のお役に立ちたいとも思っています。

これまでほとんど語ることはありませんでしたが、わたしには長男・ユキと長女・サユという2人の子どものほかに、もう一人子どもがいました。

長男・ユキを出産した、その2年半後に次男を死産というかたちで亡くしていました。とても辛い思い出です。

次男は妊娠8カ月の超音波検査で、胎児の成長に問題があることがわかりました。「成

長が遅い、体重が増えない」と医師から指摘を受け、お腹に長い針を刺して羊水検査を受けると、18トリソミーという、染色体の異常が偶発的に起こる病気であることがわかりました。とくに心臓の心室の状態が重篤で、出産後にはすぐに新生児特定集中治療室に移す計画で準備が進んでいました。当時、この病気のお子さんが、外国では15歳まで生きた事例があることを説明され、親子で病気と闘っていく覚悟をしていました。

出産予定日が近づくと、もともとの体力が弱かった次男の心臓は、陣痛が始まってすぐに動きを止めてしまいました。心臓が止まったと聞かされても、わたしのお腹は胎動を感じ続けていました。

「生きています！　先生触ってください、動いています！」

そう訴えましたが、「それはお母さんの腸の動きです。間違いありません」と静かに諭されました。

母としてしてあげられることは、せめてほかの子どもと同じように産んであげること、それぐらいしかありませんでした。

とてもハンサムな男の子でした。

もう子どもは産みたくない……、もう赤ちゃんを見たくない……と、わたしの心は激し

くみだれ、壊れかけていました。それでも「このままではいけない、早く心を整理しなければ」と、2週間の入院期間は、あえて新生児がたくさん居る病棟を自ら選び、赤ちゃんの泣き声を聞いても動揺しない訓練を希望しました。

このころのことは、それだけで一冊の本が書けてしまいそうなので、機会があれば、またお話ししたいと思います。

そして、悲しみが時間の流れとともにやわらいだころに、サユがわたしのお腹にいることがわかりました。

もう嬉しくて、嬉しくて。

次男のことがありましたので、慎重にセカンドオピニオン、サードオピニオン、つまり3つの病院で、お腹にいるサユの様子を見守りました。

そして2001年の10月に、サユは元気に産声をあげました。

サユは、周囲の心配をよそに、まるまると太った、まるで健康そのものといった赤ちゃんで、みんなを笑顔にしてくれました。

当時、幼稚園児だったユキは、妹の誕生が嬉しくて、妹の写真を幼稚園のカバンに入れて持ち歩き、「ぼくの妹だ」と自慢気でした。2人の子どものお母さんになったわたしは、育児に奮闘する毎日でした。

夫は地方での仕事が多く、ユキ、サユ、わたしの三人は、お風呂も買い物も寝室もすべて一緒。どんなに忙しくても嬉しい気持ちのほうが勝って、幸せを噛みしめていたのです。

兄妹で風邪や中耳炎になった時期が重なり、延ばし延ばしにしていた乳児の6カ月健診に行けたのは、サユが7カ月になったころでした。

病院に行くと同じように生後6~7カ月くらいの赤ちゃんが集まっていました。

7カ月齢ともなると、成長の早い子だとつかまり立ちを始めるころでしょうか。髪の毛も伸び、個性的なしっかりとした顔つきに変化してきます。

サユに健診の順番がまわってきました。小児科の先生が、サユの左右の手を触って何かを確かめ、そして、ちょっと首をひねる様子を見せたのです。

何か気になることでも？　とわたしが不安そうにしていると、先生はまず看護師さんに指示を出しました。

「ＣＴ！」
「はい、確認します」
何が起こったのでしょうか。
「お母さん、お子さんの体の左側と右側の動きに差があります。念のため脳のＣＴを撮らせてください。画像データがこちらに来たら、もう一度お呼びします」
「脳？」
脳に何か異常があるというならば、素人のわたしでも深刻なことに違いないと推測できます。時間が止まったような、考えがいつものようにまとまらないような、そんな気持ちになりました。
確かに左手に比べて右手のほうがよく動くなとは思っていましたが、それを見て、右利きなのかなと思っていたくらいで、まさか異常があるとは思いもよりません。生まれてから重い病気を疑ったことなどありませんでした。
サユを抱きながらＣＴ室まで向かう途中、左手は右手と比べて力が弱いのかもしれないと、そのとき初めて思いました。よく見ていると左手はわたしの体の動きに任せて、ぶらぶら揺れるような……。

左右差というなかには、手をつねって痛みを加えたときの反応も入っています。それは親が自分の子どもにはやらない行為なのですが、その痛みへの反応を見て、左右差があると判断したようでした。

結局、ＣＴだけではわからないこともあるため、ＭＲＩによる撮影の予約をし、結果は１週間後まで待つことになりました。

１週間後、先生に呼ばれて部屋に入ると、大人でいう脳梗塞の痕が見られると告げられました。

わたしは、この１週間恐れていた結果を聞いて、すぐに言葉を返すことができず、画像をじっと見つめました。

心配なのは後遺症の出方です、と先生は続けます。

画像を見たところ、左の運動機能に麻痺が出るでしょう、どこにどう出るかはわからないと。

１週間我慢していた涙が一気に溢れ出ました。わたし自身に問題はなかったのか、妊娠

中に失敗をしたのではないだろうか。
そんな思いで胸が苦しくなりました。
「正常分娩で出産していますし、ご自身や何かを責めることはやめてください。むしろ、これからのことを考えましょう。お母さん、今とても辛そうな顔をされていますが、辛い顔はしないでください。辛いのはお母さんではないですよ。娘さん本人です。サポートする人がナーバスになっている場合ではありません」
そう年配の先生に言われ、「しっかり!」と自分に言い聞かせました。
この子が大きくなったとき、辛いよ、怖いよと頼ってきたときに、わたしが泣いていたら、きっと不安になるでしょう。わたしは、この子のそばにいて「大丈夫だよ」と笑顔でいなくてはならないのだと、この診察室で心に決めたのです。

予後を聞いても、病院の先生は「どうなるかわかりません」、あるいは「個人差がありーます」といった一般論しかお話しになりません。
確かに、回復には個人差があることでしょうし、本人や家族を喜ばせすぎても、期待させすぎてもいけないのが病院の先生なのかなと思いました。もちろん「一生このままです

よ」とも言えないでしょうし、「頑張れば必ず治りますよ」とも言えないでしょう。そして、おそらく先生たちは両方のケースを経験されているのでしょう。

ただ、娘の場合は乳児でしたので、大人の脳梗塞とは違って、脳の成長がまだある。とくに15歳まではリハビリの効果が大きく、成長の助けで良い方向に向かう可能性があるとも言われました。

この日から、新しい親子の関係がつくられていったと思います。サユ自身が病気を理解するまでは、わたしがマッサージとストレッチをしてリハビリを助けます。

時々母に来てもらい、子育ての手伝いをお願いすることもありました。芸能界の仕事もさせていただいておりましたので、サユのことだけではなくユキと過ごしてくれることも助かりました。また、わたしに代わって、サユのリハビリを手伝ってくれることもありました。お座りができるようになったときには、鏡の前でリハビリをしたり、いっしょにお遊戯をすることで、上手に踊りたいのに踊れない自分の体の状態を知らせようとしたのも母のアイデアでした。

サユは、自由にならない自分の左の手足に徐々に気づき始めました。

ただ嬉しい誤算は、予想以上にサユが負けず嫌いだったことです。なんとか動かそうと必死に頑張るのです。2歳で話ができるようになると、リハビリのことも少しずつですがわかるようになってきました。

幼稚園に入るころになると、足に金具の装具を着けて歩けるようになりました。左手は、とくに指のコントロールが難しいので、利き手である右手を使って生活しています。左手の支えがないので、日常生活では右手だけで生活できるように小さいころから練習してきました。

そして周囲の見守りもあり、幼稚園を出たあとは、お兄ちゃんと同じ私立の小学校に通い始めました。

お兄ちゃんやその友達によって登下校も助けられていました。

しかし、娘は、みんなと同じことができない自分がすごく悔しいようで、もともと持っていた負けん気の強さが焦りみたいなものに変わったのか、たびたび学校で過呼吸を起こすようになりました。

夏休みを過ぎたあたりから、長男のユキは中学受験の勉強をしたり、中学校への夢を語りだしたり、卒業アルバムの写真を撮ったりと、卒業の準備を少しずつ始めるようになりました。

娘は「お兄ちゃんはもうすぐ学校からいなくなるんだ」ということがわかってきたようでした。

兄が自分のそばからいなくなるという気持ちが、彼女の不安をより強くしたのでしょう。夏休みを過ぎたあたりでサユの過呼吸は、さらにひどくなりました。

学校の保健室は医療施設ではないため、医療的な処置はとれません。保健の先生は体育の先生の兼務でしたし、1日に何度も過呼吸になる生徒には、対応が難しかったのでしょう。そのたびに迎えにいく必要があり、わたし自身、仕事を入れることが難しくなりました。

小学1年生のとき、七五三のために髪を伸ばしていたのですが、過呼吸がひどくなり始めたころ、娘の髪をといていたら円形脱毛症になっていることに気づきました。

本人に言ったらよけい気にするかなと思い、小児科で先に円形脱毛症の相談をしておいて、その後、娘をつれていき、液状タイプの塗り薬や軟膏をいただきました。

でも、ひとつ治るとまた新しいのができ……。前の方にできたときには焦りました。なんとか髪の結い方を工夫して、本人も、そして友達からも見えないよう、わからないようにしていました。

安定剤を処方していただいても、その傾向は治まらず、学校に行っても途中ですぐに迎えにいく日々が続き、学校も休みがちになりました。このままでは勉強にもついていけなくなる、どうしてよいのか途方にくれました。



春休みの旅行で

第四章　子どもたち

壁

わたしは、まず障がい者サポートのための勉強を始めようと思いました。勉強といっても幅広く、何から手をつけたらいいのかもわかりませんでした。まずは、障がいのある方々の手記、医療書、国のサポート制度に関する本など、本を読むことから始めました。

いざ学び始めてみると、学生のころに勉強する時間が十分ではなかったせいか、夢中になって読み漁り、わたしの「学習」に対する意欲が強いことを知り、自分でも驚きました。インターネットで論文の専門サイトにアクセスして、専門性の高い言葉のすべては理解できないまでも、最新の研究の情報も探ろうとしました。

また経験者の方の話も貴重でした。リハビリセンターで同じように後遺症のあるお子さんを持つ先輩ママさんたちは、医療制度は住んでいる自治体により差があることなどを教えてくれましたし、障がい児向けの使いやすい文具や生活用品などについても教えてくだ

さり、大変参考になりました。
障がい者に関する講演会の情報もキャッチするようにしていました。
しかし、いろいろな大学で行われる講演会は専門性が高くて難解です。とてもハードルが高く感じました。確かに有益な学びもありましたが、全体的に費やす時間が長いわりに成果が少なく、学ぶ方法を変えないと効率が悪いと思うようになりました。

時間は待ってくれません。サユの小学校での状態も悪化していきました。
過呼吸の前には震えに襲われるようになり、サユにとって心身のバランスの崩れは恐怖心を呼び起こすようになりました。
そんななか、保護者が見学できる授業があり、娘の様子を観察しましたが、そのとき、これ以上は無理だと思い知らされたのです。
一例を挙げると、学校生活では先生がプリントをいちばん前の席の生徒に渡し、渡されたプリントを順番に後ろの席の人にまわしていくことがありますが、ほかの生徒より10倍近く時間がかかり、苦しそうに顔を歪めていました。
リラックスしていたら、少し遅いくらいでできるはずなのに、焦りや不調からか、身体

がコントロールできていないようです。

クラスメイトはみんな小学1年生。そんな年齢なので、ほかの生徒さんも自分のことで精いっぱい。友達に手を貸すなどということは、もちろんできません。

サユが赤信号を発している。早く本格的に転校先を探さなければと、わたしはあせりました。

「お断りするのではありません、ただ健常な子どもと一緒にいることがストレスだとするならば、こちらの学校に来ても同じことを繰り返すのではないですか?」

自宅からいちばん近い公立小学校に、今までの私立小学校とは違う可能性を求めたのですが、先生のおっしゃることは、まさにそのとおりだと思いました。

望みのありそうな教育機関はすべてあたってみようと思いました。

親としての望みは、みんなと同じように、学年相応の勉強が身につくこと。小学2年生への進級が近いこのタイミングで編入を受け入れてくれること、それだけでした。

次に伺ったのが、家の近くを通学専用のバスがよく通っていた、名前だけは知っていた

都立の特別支援学校。

うちからバスで20分くらいでしょうか。

転校・編入を担当する先生にお時間をとってもらい、会いにいきました。

「ご希望の学年相応の学力の定着は、お約束できません」

「どういうことでしょうか？　授業はしないのですか？」

どうやら小学1年生の教室のなかには、さまざまな障がいのあるお子さんがいるとのこと。肢体不自由、聴覚障害、視覚障害、知的障害などがあるお子さんです。

「彼女のためだけに授業を展開することはできません」

義務教育ですから教科書は同じものをもらえます。人手があれば、また先生たちの時間があればもちろん勉強は見てもらえますが、「期待にお応えできない可能性もご理解ください」という回答でした。

「では、娘がこちらに転校できた場合、体の機能回復があって、普通の中学に進みたい、高校や大学を受験したいと途中で進路を変えることは無理だということですか？　学年相応の学力が身につかない授業って、そういうことと考えればよいですか？」

「家で勉強するという方法もあります」
「家で……ですか？」
「過去には、同じご希望の保護者の方々もいらっしゃいました。多くの方は家庭教師が家で勉強を見てくれたそうです。そのような方法もあわせれば、中学から普通校に戻ることも、高校受験も可能だと思っています」
先生はそう現状を話してくれました。

この瞬間、みっともないほど泣き崩れました。
家庭教師が必要ということは、それぞれの家庭の状況によっては、お金が出せなくてあきらめるとか、そういうことになります。
障がいのある子どもたちも、将来に大きな夢や希望は抱くべきです。
家庭教師の費用が出せるか出せないか、生まれた家の資産や保護者の所得で、教育が受けられるかどうか、そして子どもたちの人生が変わるというのです。
我が家はサユに家庭教師の費用を出せないわけではありませんでした。

でも、平等に開かれた義務教育の期間に理不尽な思いをする子どもたちがいると知ったからには、うちの娘だけがよければいいと納得するのは、どうしても許せませんでした。教育を受ける権利は、みんなに平等にあるはずです。このことだけは、なんとか守れないだろうかと悔しくて、現場の先生方にあたっても仕方がないことはわかっているものの、涙ながらに訴えるしかありませんでした。

それまでは口に出したことはありませんでしたが、このときは、自治体の教育相談も脆弱で頼りにならないことなど、たくさんの不満を訴えました。すべての思いが溢れて、取り乱しました。かろうじてお礼の言葉と頭を下げることだけはできましたが、粗末な去り方をして、家に向かいました。

途中、リハビリ施設でお友達になった、車椅子を使うお嬢さんを持つお母さんに電話をしました。

「サユちゃんの場合は、諦めないほうがいい」

そのお母さんは言いました。そして、

「うちの子は車椅子だから、最初から公立の普通小学校は諦めているの。でも、サユちゃ

んは歩けるんだから、何か道があるはず。桃子さん、頑張れ！」
そう励ましてくれました。こんな国に住んでいるのは嫌だと涙が止まりませんでした。
もしも生徒数が少ない地方の公立小学校に転校できたら、そのほうがサユも溶け込めるのかな？
でも、わたしは東京での仕事はできなくなるな。
ユキは一緒に連れていくのかな。
地方を飛び回る夫は、空港がないところに家を構えることは難しいのかな。
ここでは無理なんだ、ここでは無理なんだ、という思いが、頭の中をぐるぐると回っていました。

涙を隠して家に帰ると、さきほどの支援学校から、折り返し電話がほしいとの伝言がありました。もうこれ以上話はないだろうに。何だろうと、電話をかけました。
「お母さん、通学にかなり時間のかかる場所ですが、国立の支援学校で学年の授業をしっかりやっている学校があります。人気があって定員に空きがないと思っていたのですが、

サユちゃんの学年に1人分だけ編入できるクラスがあるそうです。しかし国立大学の附属校で〝編入も受験制〟です。受けてみますか？　学校のホームページをご案内しましょうか？」と、わざわざ電話で知らせてくださったのです。

何かが繋がる予感がしました。何かが繋がって、ふさぎかけた道が繋がるような気がしました。

隣の部屋からは、サユの歌声が聞こえました。その歌声も明るくて、光が差しているような気がしました。

そして、この一本の電話でわたしたちは助けられることになるのです。

あらためて文章に書き起こして振り返ってみると、今でも感謝で涙がこぼれます。その節は本当にありがとうございました。

その後、サユは小学2年生から国立大学附属の特別支援学校に通うようになります。

そこは国立大学附属の研究校でした。

特別支援教育のあり方を研究し、国内外に発表する重責を担う学校です。

子どもたちはみんな研究対象となります。しかし、先生方は、将来、健常な方々と同じ社会の担い手のひとりとなれるように、熱心に支えてくださいました。

その学校は、当時住んでいた自宅から見ると、東京都を横断するような場所にありました。学校までは、わたしの運転で、片道1時間半。近隣だけはスクールバスが利用可能でしたが、多くの保護者の方々が、車で送り迎えをしていました。

生徒たちは、それぞれに障がいも異なり、悩みもそれぞれでしたが、互いを支え合う気持ちがあり、サユもあっという間に溶け込みました。自分の不自由なところを伝え、また友達の苦手なところを積極的に手伝うようになりました。

母親同士も毎日の朝夕の送迎で顔を合わせ、とても仲良くしていました。

このころ、夫は長年のスポーツ人生によって体に痛みを感じるようになっており、また年齢的なことも考えて、新しい仕事の準備をしていました。

子どもたちのことは任せると頼まれていました。そんな夫を見ても、人生の轍づくりに、誰もが悩み苦しむことがわかります。

わたしが朝の情報番組の仕事のときには、仕事の時間調整が比較的可能だったわたしの兄が、サユを学校に連れていってくれました。

わたしたち親子は、比較的スムーズに就学問題を解決できたほうかもしれません。

車椅子を使う肢体不自由のお子さんたちは、地域の普通校に通うのが難しい現状があります。

全国の公立学校の校舎の多くは、バリアフリーを整えていません。予算も優先されてはいません。

もし地域の学校に通うなら、教室移動をする際の階段の上り下りは、保護者が子どもを抱えて行うことになり、またトイレでの介助が必要な場合も保護者が待機してそれを行います。

しかし現実には、小学校生活6年間のすべての授業に保護者が付き添うというのは、生活面からも困難が多く、普通校ではなく支援学校を選ぶ保護者の方々が圧倒的に多いと言います。日本はまだまだ特別支援教育の歴史が浅く、課題が山積しているのです。

ジェネレーション・ギャップ

「あははははは」

ユキが小説を読んで笑っています。笑ったと思ったら、真剣な顔でページをパラパラめくり、食事も忘れてしまうほどです。

みんなが集うリビングで読んでいるということは、知られたくないような本ではなさそうです。

「何を読んでいるの？」

覗き込むと、日本語のような違うような、謎めいた世界観を表現する言葉が並んでいました。

「エーラッシェー！」

「オットット」

「カワイイ、ヤッター！」

「ニンジャ、ソウル」
「ネオ・サイタマ」
「アイエエ！ニンジャ、ニンジャナンデ？」
「アッハイ」

わたしには、まるでわからない世界観です。

「……なあに、何の本？」
「これ、面白いんだよ。『ニンジャスレイヤー』っていうアメリカの作家が書いたサイバーパンク小説」
「ニンジャの物語？」
「どっちかっていうと、アメコミ（アメリカンコミック）のヒーローを〝ニンジャ〟って言っている感じなの」
「お母さんには、わからないなぁ……」
「たぶん誰にもわからないから面白いの。母さんも読んでみたらいいよ」
と言うユキ。

「サイバーパンク」って何かしら？
そう思ってパソコンで調べると、近未来的な街の画像がたくさん出てきます。
「舞台は日本なの？」
「一応、日本。たぶん、日本。フィクションだから設定は気にしないで、とにかく面白いからオススメだよ」
ツイッターで無料連載されていた小説で、これまでもその更新を楽しみに読んできたようです。それが書籍化されてファンの間ではお祭り騒ぎだといいます。
こんなふうにユキは、いつも私に新しいことを教えてくれます。
世代間ギャップゆえの魅力なのか、それともユキの興味の世界が、わたしにとって刺激的に見えるのか……。
こんなこともありました。サユが英語の宿題をしながら、
「ママ、scuttleって、どんな意味だっけ？」
わたしはまったく答えられず（こんな単語、中学時代に教わらなかったような……）、ユキが代わりに答えてくれました。
「scuttleは、小走り。急ぐ様子だと思うよ」

「ありがとう、お兄ちゃん！」
わたしは感心しました。
「ユキ、よく勉強しているのね」
ユキは照れくさそうに言いました。
「scuttle はカードゲームで覚えたのです。母さんが子どものころは、カードゲームっていったらトランプぐらいだったのでしょうか？　僕らの世代は、対戦型のいろいろなカードゲームにも精通しておりますからね」
いつもの丁寧すぎる口調で、おどけて言いました。

そう、世代が違うのです。ユキやサユの年代は電子機器に強いところも特徴です。わたしが子どものころは、家庭用の電子ゲーム機はそんなにメジャーなものではありませんでしたが、今はパソコンやゲームの影響で、学校では習わない英単語にたくさん触れていることも驚きでした。
若い世代の子どもたちや若者たちを「デジタル・ネイティブ」と紹介されることがあるのをご存知ですか？

デジタル・ネイティブは、生まれたときから、もしくは、物心がついたころから、携帯電話、パソコン、ゲーム機器を代表とする電子機器に囲まれて育った世代で、電子機器を触ることには躊躇しない、むしろ普通に使うのが当たり前になっている、デジタル時代の申し子たちのことです。

うちが自宅用にパソコンを買ったのは１９９６年。ユキが生まれた年でした。

いろいろな感性が違って、大人は若者から刺激を受け、子どもは大人から知らない世界を教わり、この繋がりはとても魅力的なものです。

それにしても、ユキは年代差だけでは片づけられない独特な世界を持った子です。中学生になったばかりのころ、「生物部」に入りたいと仮入部書を持って帰ってきました。

「僕、友達とグループで〝ニンニクの研究〟をしてみたいんだ」

と、嬉しそうに彼は言いました。生物部にいる先輩たちが植物や食品の研究をしているというのを聞いて、触発されたのだと言います。

ご存知のようにニンニクには多くの効能があり、これから長寿社会になっていく日本の未来を考えたら、ニンニクの栄養で高齢者を助けられれば素晴らしいのは間違いありません。

「お母さんのためにもぜひ研究してもらいたいよ」

「ううん。僕が興味を持っているのは、成分じゃないんだ。何歳のときか覚えていないけど、ニンニクを電子レンジで加熱したら、すごい勢いでニンニクが回るテレビを見たことがあってね。それが面白くて。どうしてグルグル回るのか、その回転の謎を調べたいんだ」

その言葉どおり、彼は友人と6年間、ニンニクの構造の研究に時間を費やしていました。ニンニクに似た形状のものを電子レンジに入れては、「ラッキョウはこんなに似ているのに回らない」とか、「玉ねぎも期待外れだった」とか、「トマトは爆発した」とか、それぞれの水分量を測ったり、個体差の検証をしたり、ニンニクの模型を作って構造から仮説を立てたり、コツコツとデータを取ったりしていました。大きな発見などはありませんでしたが、蓄積したデータを認めていただくこととなり、中学生で1回、高校生で1回、学生向けの科学賞をもらうまでになりました。

そんなユキですが、生まれつき信じられないような能力を持っています。

彼は「速読」の達人なのです。読む速度とその理解力、把握力を測る「速読」という分野があります。彼は速読協会が行う大会で、「小学生の部」「高校生の部」「高校生・社会人の部」という3階級で日本チャンピオンというタイトルを獲得しているのです。検定での速度をご紹介すると、横書きの場合、1分間に読んで理解できる文字数が、なんと6006文字。縦書きだと、同じく1分間で4437文字。その平均読書スピードは、1分間5221文字です。

小さいころから、本を読むときは凄い勢いでページをめくっていましたので、最初のうちは、読んでいるふりをしていると思っていました。

その能力を活かして、ユキはたくさんの本を読んでいます。わたしの知らないいろんなことを知っていたりします。

この子は将来物凄いことになるのでは、と思ったこともありましたが、「速く読めることと、記憶力がいいことは全然違うよ」と言われ、笑って納得しました。

わたしとは明らかに違う世界を持つ子どもたちとの会話に、刺激を受けている毎日です。

サユの挑戦

このあたりで、サユの近況を書いておこうと思います。

途中から特別支援学校の小学部に通っていたサユでしたが、5年生のときに「中学はやっぱり外部の学校を受験したい」と言いだしました。

そのまま国立の特別支援学校の中等部を受験するのか、外の学校に出るのか、幼い彼女なりに悩んでいたようです。そして、こう決断したのです。

「わたし、支援学校にいると先生に甘えるの。わたしが困る前に、先生が先回りして助けてくれることも多い。だから、もっと失敗をするために普通の中学校に通わせてほしい」

ですが、親としては悩みます。健常な身体を持つ生徒のなかで、身も心もついていけなくなった小学1年生のころを思うと、何が正解かわかりません。

少し考えさせてほしいと思い、わたしはこう言いました。

「お母さんは即答できない。支援学校での教育は工夫がされていて、充実しているもの。将来のサユのために、どちらがいいのか考えさせてほしい」

するとサユはこう言いました。

「ママは、前の小学校のときのことを気にしているんでしょう？　あれは、わたしが弱すぎたからなの。今の支援学校では、重度な障がいのある友達が、わたしよりずっと頑張っているの。わたしは、たぶん自分の身体が嫌だとか言って逃げていたんだよ。あのころの自分に会えるなら、殴ってやりたいくらい。もっと頑張れって！」

娘の強い気持ちに押されました。もし彼女の決断が間違っていたなら、そのときに一緒に考えてあげればよいのです。そう思いました。

お兄ちゃんが男子校なら、わたしは〝女子校〟に行きたいとサユからのリクエストを受けて、受験可能な私学の女子中学校を探し始めました。

ですが、実際にはなかなか見つからず、苦戦が続きました。

その日も朝から娘の学校の説明会やら、個別に面談を申し込んでいた女子校を2つまわったりしていました。

個別相談コーナーではいろいろと尋ねましたが、障がい児を受け入れてくれる学校は本当に少ないのだという現実を突きつけられ、絶望的な気持ちになります。

身体的な支障はあるけれど、一人でも歩けるし、勉学への問題もないことを説明しても、受け入れに関して首を縦に振ってはもらえません。

「手伝いの手が足りないのです」

「同級生にサポートは頼めませんよ、本業は学業ですから」

「お預かりしたとしても、ケガなどのリスクが高いのでお断りします」

学力を判断してくれるのではなく、「身体障がい者手帳を持っている」というだけで、手伝いが必要だと困るといって、どこも非常に消極的でした。

現在通っているのが特別支援学校だと聞けば、勉強の進度までも心配されて、なかなか厳しいことも言われます。

「受験するだけでもダメですか？　落ちてもいいから受験だけでもさせてください」

そう食いついてみましたが、返事はどこも「NO」でした。

親が元気なうちはいいけれど、将来、娘が一人で何かを始めようとするときにも、同じ

ようなことがあるのかな。そんなことを思うと、情けなくて涙が止まらなくなりました。
この日、ブログで初めて「弱音かな？」というタイトルでこんな内容を書いています。
タイトルのとおり、初めての弱音でした。

梅雨明け後は猛暑です。
街を歩くと、多くの人が汗を拭き拭き、辛そうな顔で歩いています。
今日、わたしは小学6年の娘の来年からの中学進学に向けて、いくつかの学校に入試のことを聞きに伺いました（暑かった〜）。
皆さまもご存知のとおり、赤ちゃんの頃に脳梗塞になり、後遺症を残した我が娘は、現在、特別支援学校の小学校で学年の教育課程を教わっています。
しかし、現在通わせていただいている学校は、中学にあがる前に受験があり、必ず内部進学が叶うわけではありません。
長男が中学受験をしたのをしっかり見ていた娘は、塾に通うことを希望し、天才肌ではないですが、コツコツ勉強をしてきました。
そんなわけで、昨年から都内の私立中学校の受験を視野に、訪ねて歩いています。

多くの私立中学校の受験資格、出願資格には「心身ともに健全な者」という記載があります。娘は軽度ではありますが、左手足に麻痺が残っていますから、「心身ともに健全」ではありません。

「健全」という言葉を辞書で引くと、その意味は、「正常に働き、健康であること。完全なこと」となっているのです。「勉強や行事活動に支障のない者」とも書かれています。

ですから、今日も2つの女子中学校で受験を断られてしまいました。

試験の点数で不合格になるなら「もっと努力した人がいたんだよ」と、フェアな感じがするのですが、受験会場に行く機会まで断られるのは違う気がするのです。

娘のように後遺症があると、福祉的な「権利」に守られ、助けられることも多いですが、「権利」だけを欲しがるのではなく「義務」も果たせる人になりたい！（社会を支える一員として）と願って、勉学で人として育とうと希望を抱きますが……。

実際は甘くない。受験資格さえ、なかなかもらえない。

国が用意した公立の中学校で、義務教育が担保されているのは頭ではわかっているけれど、行儀よく、あっさり納得できないわたしであります。だって娘は、自分の身体が嫌いになったり、諦めることばかり覚えたり。自己肯定ができなくて……辛そうなんだもの。

健常な長男の中学受験にはなんの壁もなくスイスイ願書が出せたのに、願書も出せないなんて。

今日は弱音を吐きましたが、ひと晩寝たら「前向き思考」になることを約束します。

ソーシャル・インクルージョンは難しいですね。

ファイト!!

今思うと、あのころは、ずいぶん追い詰められた気持ちになっていました。

離婚後にその真相を探ろうと、週刊誌の記者が支援学校の駐車場にまで来て、追い回されるように写真を撮られることも続いていました。隠れることが、どんどん嫌になっていました。サユも、わたしが芸能人ということで自分の障がいのことを隠されるのを嫌がっていました。何も悪いことをしているわけではないのに、隠されるのは耐えられないと。

いろいろな意味で前向きに進もうと訪ねた次の女子校で聞いた言葉に、耳を疑いました。
「受験？　もちろん、ぜひどうぞ！」
「いいのですか！」
この学校が障がい児童の受験を許可している理由を尋ねると、先生はにっこり笑って、
「経験があるからです」と自信に満ちた優しい声でおっしゃいます。
「今日の説明会の手伝いをしている生徒のなかにも、障がいのある子がいますよ。お母さん気づきませんでしたか？」
わたしは「どうせここも無理だろう」ということばかり考えていたため、気づかなかったのかもしれません。
「今度はお嬢さんを連れていらしてください。わたしたちから『受験、頑張れ』ってハッパをかけます」
今、サユはその学校で学生生活を送らせていただいています。ありがたいことに素晴らしいお友達や、先生に恵まれていきいきとした毎日です。

中学に入って初めての冬に、こんなことがありました。

夜中じゅう雪が降り続いていた翌朝のことです。登校時間になってもまだ道に雪が残っていました。

朝のニュース番組では、「通勤中に転んでケガをしている方もいらっしゃいます。これからお出かけの皆さんは十分にご注意ください」と注意を促しています。

わたしもそうですが、東京で暮らしているとめったに雪の道を歩かないですし、雪道に適した靴なども持っていません。ですから、おっかなびっくり歩くことになります。

スタッドレスタイヤを装着している自家用車を指さして、「今日は、学校までお母さんが車で送るから乗って！」そう言いました。

すると、反抗期のサユは「は？　なんで？」と返してきます。

「転んだりして右手や右足を骨折でもしたら、左が不自由なぶん、困るでしょう？」

納得いかないという表情を続ける娘に、

「親の言うことはたいていてい間違ってない！」と、強めに言葉を発し、彼女を無理やり車に乗せました。

走り始めると、人間の顔とはこれほどまでに膨れるのかと驚くくらい、サユは隣の席でふくれっ面をしていました。そして、こう言うのです。

「これまで、お母さんの言うことはたいがい正解だったのかもしれないけど、今日は間違っている！　東京で雪の道を歩く練習ができる日って、大人になるまでに何回あると思うの？　お母さんはわたしよりも先に死ぬんだよ。親が元気なうちだから安心して失敗できるのに、どうしてそれをさせてくれないの？　あなたが元気なうちにいっぱい失敗させてください」

それを聞いて、まったくもってそのとおりだと思いました。

遅刻したらどうしよう、骨折したらどうしよう。そう焦って娘を車に乗せましたが、わたしが元気なうちだからこそ、遅刻も骨折もフォローができるのです。

過保護にしてはいけないとずっと思ってきましたが、彼女はわたしが思っている以上に現実と向き合っていて、強くなっていました。そして謝りました。

「ごめん、今日はお母さんが間違っていた」

息子のユキは、どちらの気持ちもわかるけど、帰宅してもまだ反抗的な態度をとる妹に

少し腹を立て、「いい加減にしろよ。母さんだって心配してるんだ。そんなに雪道を歩く練習がしたいなら、北海道に住めっ。親戚は北海道にたくさんいるぞ」。

そう言って、少しだけわたしの肩をもってくれました。

お兄ちゃんも娘も、なんだかじつにたくましく育っているようで、嬉しくなりました。

子どもから学ぶことも多くなり、これからもさらに親子で高め合って歩いていけるといいなと胸が熱くなりました。

閉まるドア

わたしの母は、いつも幸せそうでした。いつも笑顔でしたし、わたしや兄をやたらと抱きしめては、「かわいい」「大好き」と繰り返します。

ギューッとされると、時に暑苦しかったりもするのですが、わたしもとても幸せでした。

今思えば、母に「大好き」と抱きしめられたことは、わたしのなかでのひとつの大きな自己肯定感となっています。わたしは人に愛されている、わたしはここにいてもいいんだ、そして、この人は絶対に裏切らないという、確固たる自信になっているのです。

「お母さんは幸せよ」とか「あなたたちがいるから毎日頑張れる」と言う母の言葉を聞きながら、子どもってそんなにかわいいものなのか？ と疑問でしたが、母を見ながら、子育てがそんなに楽しいものなら、ぜひわたしもしてみたいと、母を通しての憧れがありました。

おそらく、母の態度が違うものだったら、結婚もしたくなかったかもしれませんし、子どもをここまで欲しいとは思わなかったかもしれません。それほど母の影響力は大きかったのです。

子育てに関しては、まさに母の影響が大きく、言葉による愛情表現とスキンシップを、長男が生まれるとすぐに実践しました。

そんな母に影響を受けたわたしの子育てでしたが、予想外だったのは、中学1年、13歳のころから始まった長男の反抗期でした。

ずいぶん嫌がって拒絶されました。反抗期といっても、なにぶん礼儀正しい息子ですから、無視や暴言ではなく、礼儀正しい言葉で距離をおき、近づけまいという作戦です。

子どものときのように、ギューッとしようとすると、

「お母さんは何をしようとしているんですかっ！」とか。

「お母さんは、人の気持ちが考えられないんですかっ！」とか。

「混沌とした僕の気持ちはどうすればいいんですかっ！」とか。

あるときは……おそらく本で覚えるのでしょうね。

「僕のこの言い表せない、無尽蔵に湧き上がってくる感情を、どうして理解できない人なんですかっ！」とか。

散々まくし立てた後、ドアをバタン！と閉めて、自分の部屋に閉じこもってしまう日々が続きました。

さて、どうしましょう。

わたしは考えました。そうやって難しい言葉をまくし立てられても、負けてはいけない。ここで距離をとったら、もう二度と近づけないかもしれません。そして、一生涯、歩み寄れないかもしれないのです。

「ここで距離を離すな！　離すもんか」と自分に言い聞かせていました。

ですから、毎日、しつこく……（こんなお母さん、多くの方は嫌だと思いますけど）、「反抗期ですか？　そうなんですか？　終わったら教えてくださいね」とまとわりつきながら、あまり大声を出されない程度にポンポンと息子の頭に触ることを続けたのです。

中3も終わりくらいになったころ、ある日、触っても逃げないことがありました。

「あれ？　最近は大丈夫なんですか？」

そう聞くと、
「いや、なんか最近ちょっとよくなってきたんです」
と言ったあとに、
「峠は越したかもしれません」
と言うのです。それはもう嬉しくて、跳び上がりたいほどでした。
「峠は越えましたか！　じゃ、お母さんももう少し頑張りますっ！」
そう言うと、「はーい」という返事です。
つくづく面白い息子だなぁと思います。

彼も今はもう大学生になり、体も大きくなっていますが、幼いころと同じ表情をする瞬間があると、「ターッチ！」と言いながら、いまだに頬をなでたりします。
高校生になってからは愛想笑いだったり、「勘弁してよ」と逃げられたり、「お元気でなによりです」と言い残して、バタンとドアを閉められたこともありました。でも、最近はこんなことを言うようになったのです。
息子の頭や肩をナデナデしたあと、自虐的に「相変わらず気持ち悪いでしょー」と言っ

たときのことです。
「それがね、そうでもないんですよ。僕の人生で、こんなに思ってくれる人って、この先、何人出てくるんでしょうね。けっこう貴重ですよ」
そう言って、「ありがとうございまーす」と自室に入ってしまったのです。
そのときのドアは、以前の「バタン！」ではありませんでした。

ユキが反抗期のときに、部活の先輩のお母さんたちがアドバイスをくださいました。
「反抗期の子どもは『あ・い・う・え・お』しか言わなくなるものよ」
頷くときの「ああ」。
拒否のときは「いい」。
返事として短く「うん」。
聞き返されるときの「え？」。
同意するときの「おお」。
先輩お母さんの経験談からのアドバイスに胸をなでおろしました。我が家だけではない

ことなのだと。

わたし自身も中学生時代に反抗期がありました。

反抗期は順調に育っている証し。

でも、結構しんどかったなぁ。

また、閉まったドア

兄の真似をするかのように、その5年後、長女・サユの反抗期が始まりました。
このころのわたしは、人生の正午を過ぎてから、太陽は傾きを変え、違う角度から陽が差し始めていました。
人生の午前中では、わたしが子どもとして親に反抗していました。
親の束縛から離れたくて、芸能界に誘われるがままに入ったのは反抗期のころでした。
あのころは見守られる側だったので、陽射しの心地よさを感じていましたが、今度は見守る側として反抗期の子どもと向き合います。午後は西陽が強く、午前中の自分のときよりも大変だと感じています。

「最近、あなたのことをなんと呼べばいいのかわからない」とサユが言いました。
「〝あなた〟って、お母さんのこと？」

「うん」

「ママでいいよ、今までどおり『ママ』で……」

うっとうしそうに娘は答えました。

「なんか最近その呼び方、違和感があるんだよね」

「えっ、どうして？」

しばしこちらを睨み、

「わかってくれないならいい！」

今度は、サユの部屋のドアがバタンと閉まりました。ユキの反抗期を一度経験していますから、それほど驚きはしませんでしたが、厄介な時期になったと思いました。

「ママ」という呼称に違和感を覚えるということは、これまでのようにはもう呼びたくない、「子ども扱いしないで！」という主張なのでしょうか？

以来、わたしのことを「あなた」、もしくは「ねえ」としか呼ばなくなりました。

子どもと距離を置かない作戦を、兄同様、サユにも試みました。

ところが、ユキのときよりも拒絶感がレベルアップしているように感じます。

あまりにも「触るな」「近づくな」と言われるので、ここは過干渉になることを避けて、

あえて関心のないフリをしてみようか……と、駆け引きに出ました。

これまでずっと、子どもたちとはスキンシップを大切にしてきたので、距離を置いている毎日が苦痛で、そして寂しくなりました。幼いころからのサユとの歩みを思い出して、少し涙が出てきます。

サユは、わたしを追い払って、気に障るものがなくなったような、満足げな顔をしているように見えました。

ですが、5日ほどするとこんなふうに声をかけてきました。

「ねえ、戦いごっこしよう!」

耳を疑いました。目の前に立つサユは、ファイティングポーズです。

〝戦いごっこ〟とは、小さな子どもが戦隊モノの真似っこをする、そんな遊びです。

とりあえず、あわててわたしも身構えました。

サユの右腕が、「エイッ」とわたしの肩にゆっくり触れます。

本気ではありません。あくまでも柔らかくゆっくり。

ノリの悪いことが落ち度とならないように、わたしも「エイッ」とサユのボディーにスローモーションで触りました。

このとき、早くも反抗期から抜けたのか？　と嬉しくなりましたが、
「バカじゃないの？　ノッてこないでよ！」
きびすを返し、バタバタと部屋に歩いていき、またドアがバタンと閉まりました。

どういうことだったのでしょう？
わたしが寂しかったように、娘も寂しくなって少しわたしに触れたかったのかと思いました。それとも、単にからかわれただけでしょうか？
でも、心から嫌いな相手には、戦いごっこの誘いなどしないでしょう？
気長に待つんだ、待つんだ、と自分に言い聞かせることにしたのです。

それから3カ月以上たって、必要最低限の「あ・い・う・え・お」しか言わないサユがめずらしく話があるといってきました。
「あのさ、あるバンドのファンクラブに入りたいんだけど、スマホから入ると課金制なの。毎月携帯料金と一緒にそのお金が引き落とされるんだけど……入ってもいい？」
「わかった。でも、毎月のサユのお小遣いからその分もらおうと思う。お兄ちゃんも同じ

ようなことをしているから」
「了解」
そう言うと、サユは嬉しそうに笑みを浮かべました。
もしかしたら、サユの気持ちに歩み寄るキッカケになるかもしれない。そんなふうに思って彼らの音楽を、サユには内緒で聴いてみます。
これがなかなか素晴らしいのです。思春期の悩みに向き合った歌詞。ユキも言っていたように、反抗期のときに混沌とした気持ちを感じて迷っていると、「頑張って！」と言ってくれる彼ら。
わたしもファンクラブに入りました。ライブにサユを誘おうと。
サユの反抗期に気づいた、わたしより少し年上の美容師さんがこんな言葉をかけてくれました。
「たくさんの反抗期のお客さんを見てきたけれど、サユちゃんは大丈夫だよ」
「いえいえ、大変ですよ」
「僕が見ているかぎり、サユちゃんが悪い子になるのはママの前だけですよ」

「一人でこちらに来るときはいい子ですか？」
「うん。前と変わらずいい子ですよ」
「外で悪さをしていないなら、少しホッとします」
「桃子さん、今までたくさん反抗期のお客さんを見てきて、僕なりに分析したある傾向があるんです」
「はい……」
「甘えっ子ほど、将来親と離れたときの自分を心配して、離れる練習をするかのように、強く反抗していると思うんです。『あなたがいなくても大丈夫よ！』って。サユちゃんは、後遺症のことがあるから余計に、お母さんがいなくても一人で生きていける自分になろうと練習している気がするんだなぁ。ママがいなくても平気よって」
まったく新しい見解でした。ですが、深く共感できます。
美容師さんは続けます。
「親にとっても練習だと思うんですよ、子離れという意味で。いつか子どもが独立したり、仕事が忙しくなったり、結婚したりしたときに、子離れしていないと苦しいじゃないですか。僕ね、聞いたことがあるんです。子どもの仕事やパートナーを憎む親御さんがいるっ

て。子どもを仕事に取られた！　とか、恋人や結婚相手に子どもを取られた！　って。そういう意味ではサユちゃんと桃子さんは安心ですよ、これだけ反抗期と闘っていますからね（笑）」

とてもいい言葉をいただきました。それなら、今の寂しさも、きっと意味のある時間なのだと、大切にさえ思えてきたのです。

1年半後、わたしとサユはライブ会場にいました。

中学2年の夏休みが始まったばかりの暑い日で、確か高温警報が出ていたと思います。会場前は、入場を待つ長蛇の列です。

「サユ、こまめに水分を摂ってね」

「……わかってる」

「塩飴、食べる？」

「……欲しいときに言うからいい！」

相変わらずの態度です。子離れ・親離れの練習はまだまだ続くなぁと思っていました。

ですが、せっかくここまで来たのですから、ライブを目いっぱい楽しみます！　曲はもちろん好きですが、合間のトークを聞くのもとても好きです。
トークが始まりそうになると会場がシーンと静まります。
「子どものころは気づけなかったけれど、幸せって意外と近くにあるものなんだ」
「当たり前すぎて気づけないけど、家族と過ごす時間が幸せなんだよ」
そのときは、そんな感じのことを話していました。
会場には中高生のファンが多いので、家族の大切さを代弁してくれたのでしょうか？
すると……。サユの手が久しぶりにわたしに伸びてきて、ギュッと手を繋いできたのです！
またスルッと逃げられそうな気がしましたが、わたしもギュッと力を入れ返しました。
「いいの？」
おそるおそる聞くと、
「彼らに言われたら、逆らえないよ～」
サユは、わたしの目を見ず、舞台を見ながら微笑みました。
もしかすると、サユは反抗期から抜け出す「きっかけ」を探していたのかもしれません。

その日から、サユは少し大人びた表情を見せるようになりました。
成長の証しなのでしょうか？
わたしも、かつて親に、こんな表情を見せたことがあるのでしょうか？
いつか母に聞いてみたいなと思いました。



大学院の修了時、学位記を持って

第五章　人生の正午

人生の正午

わたしも幼いころはそうだった気がしますが、子どもは何でも親に質問するものです。

「どうして？　なんで？」

「これってどうやって食べるの？」

「皮をむくのよ」

「どうして学校に行くの？」

「さまざまな広い知識を身につけるためよ」

子育てをしていると、子どもは親に多くの質問を投げかけます。

でも、障がいの経験がないわたしは、サユの質問に満足に答えられないことが続くようになります。

「いつまでリハビリに通うの？　どうしてまた行くの？」

「お兄ちゃんと同じ幼稚園に行けるの？　わたしも通いたいな」
「手が動かなくても、獣医さんになれる？　やってみたいなぁ」
長男のときは何でもわりと即答できたのですが、即答できませんでした。
「ちょっと待ってね、調べるから」
と言うことが多くなりました。

サユはそのうち、質問を途中でやめるようになりました。
「ママ、あのさぁ……」
「ん、何？」
「いいや、なんでもない」
「なによ、途中でやめないで」
「だって……。どうせママには、わからないと思うからいい」
小学校低学年の幼い子どもが、こんなにも厳しいことを言うとは驚きでした。
でも、放っておくのは嫌です。心がすれ違ってしまうことがいちばんよくないと思ったのです。

何でも話し合って、一緒に解決していける関係を築いていかないと、これから先の長い成長を助けてあげられません。
でもそのころのわたしには、彼女をどう導いていけばよいのか、わかりかねていました。そしてわたし自身、もっと学ばなければいけない、そう感じていました。

そんなある日、中学受験の勉強をしている息子が新しい問題集を買いたいということで、大型書店に行きました。
店内を歩いて本を物色していると、平積みされていたある雑誌が目に留まりました。『社会人のための大学と大学院』。
中を見ると、大学や大学院で学ぶ社会人の方々の「学んでよかった」『わたしは変わった」という感想や、具体的にどういう学校で何を教えているのかが書かれていました。
仕事を持っていても、夜間や土日を利用して履修できるのです。通学制だけでなく、通信制という方法も取れます。大人のためにこんなに学校が用意されているのだとこのとき初めて知り、胸が高鳴りました。
帰宅後、購入した雑誌を夢中になって隅々まで読んでいると、わたしと同じ世代で、同

じくお母さんでもある「奥山さん」という女性の記事に目がくぎ付けになりました。
フリーで出版関係のお仕事をしていて、キャリアカウンセラーという資格を持ち、かつ法政大学の大学院1年生という女性です。さらには、客員教授として教壇にも立っている。掲載されている顔写真を拝見すると、おだやかで今が充実しているという表情をされています。どこか憧れのような思いが募りました。
とくに気になったのは、「キャリアカウンセラー」という肩書です。進みたい道がわからなくなったとき、進路相談をお願いできるのでしょうか。

インタビューページには、奥山さんが経営する会社の名前が載っていました。会社の情報を見ると、我が家から近いではありませんか。
「会いに行きたい！」
でも、見ず知らずの方に連絡をとることは、わたしの職業上、用心深くなる必要があります。悩んでいるときに、ちょうど兄から電話がかかってきました。
用件を話し終えたときに、思い切って兄にアドバイスを求めました。
行くべきか、やめるべきか。

「調べてあげるよ。名前が書いてあるんでしょう？　教えて。正確な漢字で」
「わかるの？」
「知り合いに姓名判断の名手がいるんだ。桃子の名前とその女性との相性がいいか、調べてもらおう。そんなキッカケでもないと、桃子も思い切るタイミングをつかめないだろ。俺に任せて。わかったらメールするよ」
姓名判断って……。面白いことを言う兄です。でも、兄の言葉で心がスッキリしたのも事実。連絡を待つことにしました。
翌朝、目が覚めると早くも兄からメールが入っていました。
「人柄よし。相性よし。賭けてみる価値あり。兄は応援しています」

わたしは急いでパソコンに向かいました。兄の姓名判断の話は、今思えば、作り話だったのかもしれません。でもわたしは、このタイミングを大切にしたいと思いました。
『芸能界で働く者です。個人的にキャリアカウンセリングを受けることは可能でしょうか？　仕事上、秘密厳守でお願いしたく存じます。可能でしたらあいている日程を教えていただけませんでしょうか？』

しばらくして返事がきました。
『承知しました。お引き受けしたいと思います』

のちに仲良くなってから聞いたのですが、メールの署名欄に「菊池桃子」と書いてあったので、わたしを待つ間、とても緊張なさったそうです。そして会社のドアが開き、本当に「菊池桃子」が入ってきたとき〝本人が来た！〟と驚いたのだそうです。

キャリアカウンセリングを受ける目的は、主に進学についてですが、自分の生き方を誰かに客観的に見てもらい、今後の人生についてのアドバイスが欲しかったのです。

そして、思い上がりかもしれませんが、悩んだ我が家の経験がいつか誰かの役に立つなら、それを伝えていく術も身につけたいと思っていました。

病気や障がいの話題に触れるとき、人の心のとても繊細な部分に繋がっていることを意識しなくてはなりません。その繊細なところを傷つけないためのルール、たとえば法的なことも最低限は覚えておきたい。どんな勉強をしたらいいのか、それを誰に相談すればいいのか、疑問に思っていたことをすべてお話ししました。

冒頭にも書いたとおり、奥山さんとの面談でわたしは「人生の正午」という概念を知り

ました。
まさに40歳になろうとする、その直前に奥山さんのところへ行きましたので、このときがまさに人生の正午でした。このタイミングをうまく乗り越えた人は、後半の人生がプラスに転じる傾向があると教えていただきました。
正午を意識した今、わたしは人生の後半戦を素晴らしいものにしていけるでしょうか。弱気にはなれません。ここからは迷うことなく前進あるのみだと思いました。
「もしもあなたが本気だったら、わたしの大切な恩師を紹介します。ただし、裏切ることは絶対にしたくない先生です。本気で取り組むつもりがないのなら紹介はできません」
「ぜひ、お願いします」
奥山さんの真剣な言葉と表情に、そう言ってわたしは頭を下げました。
奥山さんの紹介で、法政大学大学院の諏訪康雄教授にお会いすることになりました。
「奥山さんからうかがいましたが、テレビに出ている方なのですか？　存じあげず、ごめんなさいね」

これが諏訪教授からわたしへの第一声でした。

先生の研究室はテレビなどで見かける、まさに大学教授の研究室そのものでした。確か、4つの言語の本が並んでいました。

場違いなところに来てしまったのかな。そんなことを考えていると、先生はわたしの顔を見て緊張をほぐそうと考えてくださったのか、こんな提案をされました。

「僕さ、お腹すいちゃって。ここを出て2軒先に炒飯が美味しい店があるんだけど、行きましょうか?」

「はい、喜んで!」

とても自然に、また初対面のわたしに気遣ってくださっているのが嬉しくて。あのとき食べた蟹レタス炒飯の味は、一生忘れることがないでしょう。食べ終わってからまた研究室に戻り、話を聞いていただきました。

わたしは受験に関する書類一式を抱え、家路につきました。

四年制の大卒ではなく、短期大学卒(しかも美術専攻)のわたしにとって、受験は簡単ではありませんでしたが、無事に翌2009年の春に、法政大学大学院・政策創造研究科

「雇用政策プログラム専攻」の修士1年生となったのです。
諏訪教授は、わたしに学問の素晴らしさを教えてくださった、人生における恩人です。キャリアの転換期である〝人生の午後〟の入り口でたくさんの栄養を与えてくださり、成長を加速させてくださいました。
与えてくださった「栄養」には、厳しかったという意味も含まれます。とりわけ、学問の作法についてはとても厳しかったと思います。
でも、大人になってから「担任の先生」ができた心強さは、本当に幸せなものでした。
迷ったら、「こっちだぞ！」。
自信をなくしたら、「みんな、そんなものだ」。
自信過剰になったら、「何か間違っている」。
教え子たちから目を離さず、導いてくださる。
わたしにとって、諏訪先生は正義の味方。そして「助けてくれる」という意味でも「ヒーロー」なのです。
このおふたりとの出会いを得るためには、「少しの勇気」と「踏み出す力」が必要でした。

もちろん踏み出したからといって、転んでしまう可能性もあったでしょうが、理想的な展開となったことに感謝しています。

わたしの「午後」は順調なスタートを切り、動きだしました。

二足のわらじ

大学院が始まると、ついつい深夜まで勉強することが増えました。
子どもたちが寝静まってからの勉強が、いちばんはかどるからです。
本業の芸能活動も続けていました。
レギュラーの仕事は、朝の情報番組やナレーション。それ以外に入ってくる仕事もいろいろとありました。ラジオのレギュラー番組も始まり、10代のころのように「学業」と「仕事」を両立させる毎日です。
両立は慣れているはずなのに、10代のころよりもさらに忙しく感じるのはなぜでしょう。
原因はおそらく、10代のころは家に帰れば親に生活面をサポートしてもらえましたが、今はそれがありません。むしろ、子どもたちのサポートを日々しているのですから、忙しくて当然だと気づきました。
朝の情報番組がない日でも、5時半に起きて子どもたちのお弁当を作ります。

7時半には車を走らせて、サユを支援学校まで送っていました。芸能の仕事は時間がまちまちなため、臨機応変にスケジュールを組み立てて、掃除、洗濯、炊事、アイロン、買い物、犬の散歩などをこなす毎日。この時期は、サユの送迎があったので仕事もなるべく夕方までに終わらせたいと、事務所に無理を言っていたのです。

夕方4時にサユを迎えにいき、子どもたちに食事の説明をして、地下鉄に乗るために駅に向かって走ります。学生ですから、車での登校は原則禁止です。

ギリギリセーフで教室に入り、夕方の6時半から3時間、2コマ分の授業です。土曜日は、ほとんどの時間を授業にさきました。

日曜日ももちろん、仕事か家事か、宿題などの勉強で、一日が終わってしまいます。

こうして、不可能かと思うスケジュールを消化していけるようになると、自分に自信が持ててくるから不思議です。

アイドル時代、学業と仕事を両立していたときも感じていましたが、幼いころから自分に自信を持てなかったわたしでも、できるようになっていくことで、少しずつ自分で自分

を褒められるようになっていくのです。悩む暇すらなかったことも利点でした。
わたしは、お会いする方々から、「楽観的に見える」と言われることが多いように思います。いつも笑っているからでしょうか。
悩みがなさそうなどと言われることもあるのですが、根本的には幼少期からネガティブな部分を抱えているので、一つのことだけをやっていると自分に厳しくダメ出しをしてしまい、楽観的に考えられなくなるところがあるのです。
つまり、やることが一つしかないと、落ち込んだときに頭の切り替えがうまくできずに落ち込んだままになってしまう……という悪循環に陥るのです。
そんなときにもう一つの世界があると、頭をうまく切り替えられて、落ち込みすぎないように工夫ができるようになります。
子育てもずいぶんラクになった今、教育関連の仕事と芸能の仕事があるのは、とてもありがたいこと。切り替えのスイッチを上手に使うことで、自分を苦しめるような事柄もうまく調整できているのです。
そして、二つの世界があることで人との出会いも、学ぶことも、2倍になっていること

を感じます。その2倍の恵みは、自分だけではなく、普段助けてもらっている家族や周囲の方たちにも、何らかのかたちで還元できるでしょう。

今後も、二足のわらじは続けていこうと思います。自分の性格を理解したうえで、工夫ができるようになってきたことは、人生の午後に入った者の余裕なのでしょうか。

なせば成る！

「雇用政策」の勉強は、やればやるほど、これが自分のやりたかったことだと思えました。この学問を探っていくと、働く人々を育てるという観点から「人材育成論」が見えてきます。

この人材育成の研究や議論は、あらゆる年代層へ、また男性、女性といった性差にも言及されるものです。

次代を担う子どもたち、義務教育のなかのキャリア準備、就職を目前にした大学生のキャリア教育、男女を問わず中年期の人材開発、結婚や出産で離職した女性の再チャレンジ準備、高齢者のセカンドキャリア、さまざまなハンディキャップを有する人々の支援と人材育成のあり方など、すべての人に目が向けられていました。

勉強を始めた当初は、娘のことがありましたから、障がいのある人々のキャリアのこと

ばかりが頭にありました。

でも、授業が進んでいくと、女性としての今後の自分のあり方についても考えるようになったのです。子育てが一段落する近い将来のことから、老年期のキャリア終盤のことまで。

また、この分野は、年代、性別、個人が持つ特徴などが含まれているので、多くの人の役に立つのではないか？と気づいたのです。

このときはまだ、わたしが教壇に立つということまでは想像できませんでしたが、この成果は我が家だけではない、多くの人にも届けたい。目標はそんなふうに変わっていきました。

大勢で受ける授業のほかに、15人ほどが集まるゼミ（研究室）での授業も、学問への成長に欠かせませんでした。

初回のゼミは、入学前の3月。法政大学の三浦セミナーハウスでの合宿です。

この日、わたしは雇用政策やキャリア論の専門用語の難しさに、1日目で自信を失いました。

電子辞書で懸命に調べながら、ゼミナールの内容についていこうと必死でしたが、同じ日本語のはずなのに、言語の違う外国に来てしまったかと思うほど、言葉が理解できないのです。

「今日は、2グループに分かれて、OJTが人々の人的資本を伸ばしていくのか、またはOFF-JTが伸ばすのか。日本におけるジェンダーバイアスを考慮しつつ、そこにおける自助・共助・公助を精査し、課題を見つけなさい」

わたしは目が回って倒れそうだというのに、そこにいたみんなが「了解しました」とうなずき、さっそく議論を始めます。

「ポジティブリスト、ネガティブリストで課題を顕在化させませんか?」

「僕は、ブレストしたものをフィッシュボーンで傾向分類します」

「キャリア・アンカーも考慮したほうがいいね」

「その前に、グループ内で共通した定義を確認しておきましょう」

あとでわかったのですが、この分野で高名な研究者である諏訪教授(わたしが修士を終

えた年に名誉教授となる）の研究室には、すでに優秀な方々がさらなる研究を進めようと、修士課程、博士課程として集っていたのです。

有名企業の人事の方、国家公務員、キャリアカウンセラー、大学の教員、主に労働やキャリア関係の専門職の方がズラリ。

わたしには劣等感しかありませんでした。皆さんに自分のキャラクターをいち早く認識してもらおうと、「全然わかっていないです！　申し訳ございませんが、短大では美術専攻でした」と素直に申し出ました。そして、やる気だけはあるので助けていただきたいと。

「菊池さん、ご謙遜を」

気遣いの言葉をかけてくださったゼミの皆さんでしたが、内心は諏訪教授の研究室にまさか「イロハ」の「イ」も理解しないで入ってくる人がいるなど信じ難かったでしょう。

皆さんを驚かせたついでに、夕飯の食堂で大テーブルを囲んだ際に、自己紹介で娘のことも話しましたし、普通教育と特別支援教育との違いがキャリア形成にいかに影響するのか（のちに研究内容は少し変更しました）、その違いを検証したいと相談することもできました。

「じゃあ菊池さん、フィールドワークで質的調査のデータを集めたほうがいいよ」
「量的調査もオススメだな。きれいな相関関係が出るといいね」
「ありがとうございます。頑張りますのでご指導をお願いします」

諏訪教授だけでなく、同じゼミの仲間たちも、たくさんのことを教えてくださいました。そして、何を聞いても時間を割いてくださいました。

ゼミの合宿に初めて参加してからちょうど1年後、再び参加した合宿では「言葉の壁」が消えていることを実感しました。

自分には水準が高すぎると落ち込んでいましたが、そこから逃げず、ついていこうと必死に猛勉強した経験は、わたしの財産です。

周囲の環境に引き上げてもらう、こんな素晴らしいことってあるのですね。

Aプラスの論文

諏訪ゼミは優秀な学生が多いことで有名なゼミで、入学した当時は、レポートも、わたし以外はみんな評価Aといった状況でした。

わたしだけが、どんなに一生懸命に書いても諏訪ゼミ伝統のAが取れず、BとCが並んでいました。

Dだと落第点ですから、ギリギリです。

そんなときに、「桃ちゃん、何とかなるよ」「何とかしてあげます!」と声をかけてくれたのは、諏訪ゼミ同期の、ユミさんとヤスシさんでした。

おふたりとも、わたしより少し年上で、面倒見のいい姉さんタイプのユミさんは、プロのキャリアカウンセラーで、ヤスシさんは大手通信会社の管理職。くわえて、ヤスシさんは四年制の大学生時代も同じ法政大学に在籍していて、しかも諏訪研究室の「元ゼミ長」という心強さです。

夜間帯の授業が終わると、自習室でユミさんとヤスシさんが、ご自分の勉強の傍ら、わからなかったところを解説してくれました。

大学院内に残れるのは夜の10時まででしたので、その後わたしたち3人は、近くのファミレスで終電ギリギリまで過ごします。これが、お決まりのパターンでした。

わたしたちの研究室だけに与えられた宿題も多くありましたので、おふたりも宿題を片づけたり、そして、わたしに教えてくれたりしながら長い時間を一緒に過ごしました。この時間がわたしは大好きで、また、久しぶりにできた同級生の存在は、青春を思い出させてくれるようでした。

友人に恵まれ、周囲に引き上げられ、ついにわたしは、2年目には〝A評価〟のレポートが当たり前に書けるようになったのでした。

自信がついてくると、「わたしは何のために勉強をしようと思ったのか」とか、「どんな人になりたいのか」と自分自身に問いかける時間が増えてきました。

「努力」をしないのならば、ここに来た意味も、勇気を出した意味もない。とにかくがむ

しゃらになろうと、何度も自分に語りかけました。

「人生で最も努力した時期だった」と、今は胸を張って振り返ることができます。

レポートで良い成績が取れるようになり、この調子でどんどん単位を取っていこうと思いました。そして、入学当初は４年間で修了するつもりで申請していた大学院の履修計画を、３年で終わらせてみようと思うようになったのです。

同級生のユミさんは２年で修了、すでに修士論文も書き始めていて、修士号の取得は目の前です。

ヤスシさんは3年で修了の計画。わたしも3年で修了できるかもしれません。後輩も増えました。何もわからなかったわたしが、後輩の勉強のサポートをするという奇跡も起こり始めていたのです。

個人の研究も、着々と進めていました。

国連の障害者権利条約が、２００６年12月の国連総会で採択され、世界各国で障がいを有する児童の教育のあり方について議論が活発化していました。

論文も多く執筆されていましたが、「教育学」「福祉学」「医学」の観点からのものが多く、「教育現場での〝今〟の課題」が論じられてはいるものの、「教育を受けたあとの社会生活にはどんな影響があるのか？」という、長期キャリアからの調査は見当たりませんでした。

そこでわたしは、「特別支援教育を受けている障がい児童と、普通教育を受けている健常な児童、それぞれの保護者が、教育に何を期待しているのかという検証」、また「双方が同じクラスで学ぶ混合教育（インクルーシブ教育ともいいます）が、将来のキャリアに及ぼす影響を、保護者はどう考えているのかについての意識調査」を始めることにしたのです。

協力をお願いした特別支援学校が「教師にとっても興味深い検証」と快諾してくださり、特別支援学校の小・中・高校に子どもを通わせるすべての保護者を対象とする「全数調査」ができることになったのです。

比較分析のためには、普通教育を受けている公立の学校に通う子どもの保護者にも同じようにアンケートが必要です。こちらも奇跡のように人数が集まり、嬉しくて跳びはねたい気持ちでした。個人でこのような大きなデータを扱えることは、本当に素晴らしいこと

なのです。

わたしの長所であり、短所でもあるのが「行動力」だと周囲からよく笑われます。たとえば、「調査をさせてもらいたい」と思うと、思いつく関係機関にすぐに連絡をして、イチかバチか交渉に出かけてしまうのです。30回に1回ＯＫの返事を得られれば上出来。何度断られても次に向かう姿が、時にはコミカルに見えるらしいのです。

大学院でのレポートを執筆するときも、ＳＣＲ（企業の社会的責任）論の場合なら、直接、企業のＳＣＲ担当者に連絡をして調査に行かせてもらったり、地域コミュニティーのレポートを書く際には、町内会や自治会活動の月例会に参加して、インタビューをさせてもらったり。熱くなるとすぐに動いてしまうタイプのようです。

もちろん先方は、学生の研究のために仕事の時間を割くわけですから断られることも多く、断られて当然と思っているところに許可をいただけた瞬間は、研究者の卵である大学院生として本当にありがたく、嬉しいと思える瞬間でした。

先に論文を書き始めていたユミさんに、論文の書き進め方について相談をしました。

「桃ちゃん、論文って料理に似ていると思うの」

「料理……ですか？」

「いい材料が揃っても、〝調理法〟が悪ければ素材を活かすことができないでしょう？　論文の場合なら、調理法は……〝分析法〟ということになるかしら」

恥ずかしい話ですが、動揺しました。

調理の技術が未熟なのに、わたしは高級な素材だけを集めてしまったのです。上手に料理ができなかったら、提供してくださった方たちに申し訳ない。

どの分析法を使って理論を展開するのがベストなのか、それを考え、見つけ出すのは自分自身。自分で組み立てていかないと、自分の論文としては成立しないのです。「ここがいちばんの頑張りどきだ」と心を奮い立たせました。

わたしが籍を置く「政策創造研究科・諏訪康雄研究室」には、伝統がありました。

これまで在籍した全先輩の修士論文は、すべて〝A〟評価です。

レポートでいい成績がもらえるようになったとはいえ、わたしには修士論文で〝A〟は取れそうもありませんでした。

つい弱気になりますが、思い直して歯を食いしばります。
「まだ時間はある。まだ探すことができる」、そんな挑戦する気持ちがムクムクと湧き上がるのを感じます。
いつからこんなに強くなったのか？　なぜ強くなったのか？
周りで勉強している方々の熱心さに触発されているのでしょうか？
結果を考えるよりも、今は前に進もうと本気モードに入ります。

・必要な文献、関連性のある論文の読破。
・インタビュー調査を追加。
・新聞記事からヒントを得るべく、問題意識の似た過去記事を図書館に探しにいく。
・パソコンで、調査データの分析と組み立て。
・諏訪教授やゼミの先輩に意見を聞く。

この期間は子どもたちも邪魔をせず、わたしに勉強の時間をくれました。そして応援してくれました。

仕事と勉強の日々、体力的には辛いのに、気力は充実していました。

そして、2011年12月の半ば、ついに先生から「修了するにはこれでOKでしょう」という言葉をいただきました。

合格ラインのCはとれたのかなとは思いましたが、それ以上、どこまでレベルアップさせるかは自分自身の挑戦です。何度か「これでよし！」と、仕上げたつもりでしたが、そのたびに諏訪先生から修正の指示が入り、提出期限ギリギリまで修正を繰り返すことになったのです。

「もう少しこの章の内容を詳しく書き直して」

「ここに、概念図を入れたほうがわかりやすい」

「この小括は、簡潔に変えられないのか？」

「グラフを増やそう」

「要約は文章ではなく、構成図表で作ってみたほうがいい」

わたしだけではなく、この年に論文を提出する諏訪ゼミのすべての学生が、先生から最終修正の指示を受けていました。

誰もが、自習室で悩みながらも黙々と作業をしています。そこには、ヤスシさんもいました。目が合うたびに互いに「頑張りましょう」と勇気を交換しました。

論文は、最終的に業者さんに「製本」してもらい、事務室に提出するのが決まりです。しかし、製本してもらう時間などないのでは？ と想像するほど、先生の修正指導は終わりを見せません。

わたしたちは、ついに「製本機」を購入しました。みんなで使おうと、値段が手ごろで、かつ見栄えがよくなるような製本機を手に入れたのです。これで、自家「製本」が可能です。ギリギリまで修正できます。

「締め切り日の18時まで受け付けています」

提出の当日、締め切り2時間前の自習室。ついにみんなの製本が整いました。

何日も徹夜を続けた人もいて、わたしもそれに近いような状態でした。みんなの顔は、最後の力を絞り切った、そんな表情でした。

事務室に向かうときは、3年間一緒に学んできたヤスシさんと、心配で駆けつけてくれた、1年前に修士を修めたユミさんと、並んで受付カウンターに向かいました。

「やるだけやった！」

「これが今出せるすべて！」

そう言いながら、3人でいつものファミレスに向かったのでした。

その後は、自分が提出した論文に関することなら何でも答えられるかどうか、教授陣から質問が飛び交う口述試験があり、結果が出るのを待ちました。

合否結果はパソコン上で確認できます。あと1分で表示されるというタイミングで、わたしはパソコンのスイッチを入れました。

「成績だけがすべてではない」

そう心で唱えながら、大学院の公式ページに自分の学生番号を入れて、成績のページを開きます。すると……。

修士論文総合評価　A＋（プラス）

何が起きているのかわかりませんでした。
A＋って……Aより上があったの？
というか、わたしが？　わたしが？
諏訪ゼミ伝統のAをクリアして、さらにプラス？

「夢ではないのか？」と心配になり、パソコンのその画面をプリントアウトして、プリントした紙を手に持つと、涙がとめどなく流れて止まりませんでした。
久しぶりの嬉し泣きです。子どものように泣きじゃくってしまいました。こんなに爽快な涙があったなんて知りませんでした。
少し落ち着くと、パソコンに向かいました。急いで諏訪先生にお礼のメールを書くために。このときの先生からの返信を、わたしは生涯忘れられないでしょう。
『よく頑張りました。あなたは驚くほど伸びましたね。このゼミで最も伸びた一人です。これからも、あなたが本気を出せば、その夢は叶います。わたしは指導教授という立場で

すから、教え子の採点には関われない。だから、あなたと同じくらいホッとしています。おめでとうございます』

ご指導に心から感謝しました。そして、次の一文に驚かされたのです。

『4年目はどうしますか？　あなたの4年目に新たな提案があります。TA（ティーエー）（教育助手）をやりませんか？　雇用政策の』

わたしが、TA!?

人生の午後に何かが実る、そんな予感がしました。



辞令交付風景（戸板女子短期大学）

第六章　午後には陽のあたる場所

教育助手に

「ご自分が子育てをしていて、気づきませんでしたか？　人に教えるのが好きだということを」と、諏訪先生がおっしゃいました。
「えっ⁉　確かに、後輩に用語解説をすることはとても好きですし、面倒見がよいとゼミの仲間が言ってくれたことはありましたが……。わたしって〝先生〟に向いているのですか？」
　すんなり覚えてしまった人よりも、用語がわからずに慌てたり、劣等感を克服してマスターした人のほうが、つまずきがちな学生にも寛容になれるのかも知れない。

　人生の午後は、驚くべき世界をわたしに見せてくれようとしていました。
　TAとしての仕事は、まず授業開始の2時間ほど前に大学院に入り、打ち合わせ、その後、人数分依頼してあったコピーを事務室に取りにいき、教室に並べます。教室では、プ

ロジェクターの準備や、先生が来る前の出席確認、学生の皆さんへの用語解説、授業後にはアンケートの回収、そのほか、先生と受講生を結ぶ連絡係を務めます。

授業中は教室の後方に座り、先生の教え方をじっくりと観察。3年前にわたしも同じ授業を受けているのですが、余裕がなかったあのころには気づけなかったことを再確認することができました。そして、3年前と同じテーマの授業なのに内容が変化していることに驚きました。経済、法律、問題意識など、日々変わっていく社会のなかで雇用政策も変わるのです。

これは重要な気づきでした。

最新の学説も、1年たてば古くなってしまうかもしれません。勉強を続けなければ、あっという間に状況がわからなくなるでしょう。わたしは学び続ける決心をしました。

そして、Aプラスの論文とTAの経験を持って、わたしは大学教員に就任するための「推薦状」をいただいたのです。

大学院に入ってから、新しく覚えたことをユキやサユに話して聞かせるのが大好きでした。とくに子どもたちの将来を考えて「知っておいたほうがよい」と思ったことは、熱心

に話していました。
大学の教壇に立てるようになったら、我が家という枠を跳び越えて、たくさんの若者に伝えるチャンスが生まれます。それはユキやサユに対するのと同じ「母親」のような気持ちです。また、キャリア論はすべての年代に伝えたい要素を含んでいるので、もっと多くの方々にも聞いてもらう機会が欲しいと夢が膨らみます。

わたしは、このころ、〝ユニークな存在〟になりたいと考えるようになっていました。「ユニークという言葉は、勉強中に読んだ本のなかで出会った言葉です。他の人とは違う独創性（オリジナリティー）を持ち、たった一つの存在を目指したい、そんな生き方を模索するようになったのです。
ありがたいことに芸能界という場所は、職業領域が広く、たとえば歌手と芸術活動を両立する方がいらっしゃったり、俳優をしながらお店を経営したり、タレントと教授という道を歩んでいる方もいらっしゃいます。人の真似をするのではなく、個性を磨いていくことが仕事の幅を広げてくれます。

勤め先の大学の候補はいくつかありましたが、わたしは、そのリストにはない、母校である戸板女子短期大学あてに推薦状を書いていただきたいと先生にお願いをしました。そして、戸板時代から卒業後においても、何かと相談にのっていただいていた先生にも連絡したところ、理事長先生と学長先生にお会いすることになりました。

理事長先生と学長先生は、わたしにこう言いました。

「生涯学習は、意義深いこと。身をもって学んだ経験を、後輩に教えていってください。そしてあなたが研究を続けていけるように、教授室（研究室）を用意しました。帰ってきてくれてありがとう」

ここを卒業してからどのくらいたったでしょうか。卒業式のときに袴姿ではしゃいでいた自分を思い出します。

あれから本格的に社会人となり、そして、どれだけたくさんの仕事の機会をいただいてきたことでしょう。

結婚して、子どもが生まれ、今ではあのころよりもかなり逞しくなっているはずです。

そう、24年ぶりに母校に戻ったのです。学び直しをしたことで再確認したわたしの好奇心は、とどまるところをしりません。これからは、わたしの本気を学生に見せていきます。そして、それらのことを、わたしが楽しんで行っている姿を見せることが、大切なのではないかと思うのです。

菊池先生、教壇に立つ

2015年。戸板女子短期大学への出勤も4年目になりました。守衛さんも、すっかり顔を覚えてくれました。出勤すると、まず2階の事務室に寄ることになっています。私が使わせていただいている研究室の鍵を事務室に預けており、鍵を受け取りながら、こんな会話を交わします。

「菊池先生、前回の授業の日に捺印を忘れて帰られたようです。今日は前回分とあわせて2カ所に押して帰ってください」

「あっ、菊池先生、授業後に打ち合わせの時間はありますか?」

気づくと〝先生〟と呼ばれることにすっかり慣れています。それなりの準備をして採用に至ったという思いがあるので〝先生〟と呼ばれることに抵抗や気恥ずかしさはなかったものの、こんなに当たり前に「先生」と呼ばれていることを、取材などで訪れる方にたいそう驚かれます。

事務室で鍵を受け取ると、売店に立ち寄って、飲み物と菓子パンなどを買って階段を駆け上がります。頼まれた訳でもないのですが、極力エレベーターは使わないようにしています。卒業生だからでしょうか？ 節電しなければと思ってしまうのです。わたしがここの学生だったころは、まだ古い〝旧校舎〟で、先生方から「電気の無駄遣い」についてよく注意を受けたものです。校舎は新しく生まれ変わったけれど、創設者である「戸板関子」先生の銅像は以前と同じように置かれており、この銅像を見るたびに電気の無駄遣いをしてはならないと、エレベーターより階段を選んでしまうのです。

学内では、よく学生と立ち話をします。

「今日、先生の授業あるんだぁ」

「菊池先生、今日の授業寝たらゴメンナサイ。実は徹夜明けなんだ」

「先生、先週テレビに出てましたよね、クイズの番組！ 先生、また出て、あれ好きなの！」

今年の一年生は長男のユキと同じ年齢。ほかの生徒も年齢的には似たようなもので、そ

のせいか、わたしをお母さんのように感じるらしく、とても距離を近くに感じます。
わたしが受け持つ授業は、キャリア教育のなかの一部で、主に雇用政策に関わる部分と、キャリア論に関わる部分です。
学生は女性だけですから「女性のキャリア」の特徴を男性と比較したり、他国の女性と比較することで、日本の女性の課題を探りながら解説したりしています。
キャリア関連の授業は、戸板女子短期大学以外の大学に出張して行うこともあります。授業で女子学生だけと接していては、偏りが心配になるからです。同じ授業をしても、男子学生とでは、反応に性別の差があるのではないか？　そのような思いから、共学の大学で教えることも、ご要望があれば引き受けています。
今のところ、授業内容に関しては、反応に大きな差異を感じたことはないのですが、授業を展開していくうえで、「学生の興味を引く」のは、男子学生の方が難しいと感じています。女子学生の場合は、もともと同性ということもあり、共通の話題から入ると、わりとすんなり授業を進められるのですが、男子学生との心の通わせ方は、師匠の諏訪先生か

ら伝授された秘策に頼るしかありません。
師匠の秘策とは「自分を題材にして、笑いをとれ！」というものです。
たしかに、わたしが諏訪先生の授業を受けていたころ、先生は自分を題材にして笑いをとることで、学生に親近感を与え、話を集中して聞くように促していたと思います。
先生いわく、「自分のことで笑いをとるか、知らない人のことで笑いをとるのがいい」。
またこうもおっしゃいます。
「半径10メートル以内の自分の身近な人のことは、なるべく話さない方がいい。バレたときに叱られるから（笑）」
けれど、わたしは半径10メートルの、しかも我が子たちで笑いをとることがついつい多くなってしまいます。学生たちは、ちょうどユキやサユと年齢が近いため、彼らに親近感を感じてもらうのに最適で、つい話してしまうのです（いつも後であやまっています）。
このときも、ダイバーシティー（多様な人材）の解説から世代間ギャップの話になったのですが、どうも反応がよろしくない。世代間ギャップに興味を持ってもらうため長男・ユキの話をしました。

「世代間ギャップって、親子間でもあるのよね。ちょっとわたしの悩みを聞いてもらってもいいかな？」

学生たちが、こちらを見ます。やはり、お決まりの授業よりも関心があるみたいです。

「長男が今年、高3なの。皆さんより2つ年下ですね。その息子が洗濯物を自分の部屋にためるのよ、この教室のみんなはどう？」

思い当たる学生が何人かクスクスと笑っています。

「先週ね、高校に着ていく制服の白いワイシャツの枚数が少なくなって息子の部屋に捜索に入ったの。見渡したら、案の定、ところどころに白いワイシャツが見えて。雑誌の下に敷かれていたり、ベッドの隅でブランケットに絡まっていたり。見つけるたびに引っ張って、ワイシャツ集めをしていたの」

女子からは「だらしな～い」という声が聞こえてきます。

「悩みは、ここからなの。山積みになったセーターの下に見えたワイシャツらしき白い布を引っ張ったら、引いても引いても終わりがないのよ。何、この長さ？　そう思って手元の布を見たら、メイドさんのエプロンだったの！」

教室中が「えっー」とざわつき始めました。

「そのエプロンを自分にあててみたら、長くって、男性用サイズだって気づいたのね。それで、ふと振り返ると、部屋の壁に女装用のメイドさんのドレスまでかかってるの！」

生徒たちがニヤニヤとし始めました。

「そのドレスも長くて大きくて。息子にはこういう趣味があったのか！と本当にびっくりしたのね。探すまでもなく、足元には大きな男性サイズのハイヒールが入った箱もあったの！」

そして、本当は、息子の心は女の子なのでは？言えなくて悩んでいるのでは？と心配している母の心の内を、帰宅した息子に思い切ってぶつけてみた、と話しました。

わたし「ワイシャツを探してたら、メイドさんのお洋服セットを見つけたの……、悩んでいるのなら話して」

息　子「違う、違う、あれはプレゼントなの！」

わたし「お母さんが高校生のころは、そんなプレゼントはなかったの。だから正直に話して」

息　子「今の時代は、ノリのいい奴なら簡単に着ちゃうから」
わたし「着ちゃうの⁉」

教室中が、すごい反応でした。
「着ない、着ない！」
「それ系のオタなだけじゃない？」などなど。
そこで教室の学生たちに聞いてみました。
「そういう服って、どこで売ってるの？」
何人かの学生が、
「先生、通販！　意外とお得に買えるのが通販！」
「そんな通販があるの？」
「もしかしたら、レンタルショップかも……」
「そんなレンタルショップなんてあるの？」
「秋葉原とか池袋とかにあるよ」

わたしは「学生の皆さん、これが世代間ギャップです」と、授業に戻ろうとしましたが、「気になる、気になる、その後どうなったの？」と学生たちは、質問の手を緩めません。

「ごめん、気になるよね。本人いわく、バンドをやっている友達が、面白い服を着てパフォーマンスをするらしいから、みんなでお金を出し合って贈ろうってことになったらしいの。で、渡す前にみんなで箱を開けてみたんだって（笑）」

「あ、それ〝男子校あるある〟だよ。女子にはないノリなんですよ」

「そっかぁ、わたしは女子高の出身でジェンダー（性別）ギャップもあるうえに、世代間ギャップもあるから」と話して、肝心のダイバーシティーの講義に戻れたのです。

そして、余計な話で時間をつぶしたおわびをし、時間がないので集中してほしいとお願いしたのでした。

ほかにも、わたしの授業の秘策（ネタ？）は数多く取り揃えてあります。学生の皆さんには、またお話ししますね。

キャリアの教科書

大学院に進学したころ、読むべき図書があまりにも難しく、10代や20代のころだったら簡単に理解できたのだろうか？　これは年齢的な限界なのだろうか？　と思うことが何度かありました。

今思えば、自分の読解力がなかっただけといえますが、学ぶうえでの壁にぶちあたったとき、新聞の小さな投書欄が目に留まりました。

掲載されていたのは、80歳の母をもつ息子さんからの投書でした。

機械が苦手だった母親が、離れて住む孫の成長見たさに近所のパソコン教室に通い、メールの送受信、添付写真の開き方、さらには写真を加工して年賀状に孫の写真を入れられるようにまでなったという内容が、驚きと感動をもって描かれていました。

わたしは、そのお母さまが息子さんにおっしゃったという、「人はいくつになっても新

芽が出るのですよ」というフレーズに胸を打たれました。
こんな大先輩が「新芽が出る」と言うのなら、わたしにもまだ出るはずです。この投書に背中を押されて再び勉強に励むことができましたが、この言葉は今もわたしのなかに残っていて、40代後半になってもまだまだいろいろなことができそうな気がしています。

人生は、皆さんが誕生したその日から、今このときに至るまで、それぞれの歩んだ日々が車輪のあと＝轍（わだち）を残しています。立ち止まって振り返ると、自分の年齢分の轍が観察できるでしょう。
この本は、幼いころからのわたしを振り返り、わたしの人生の転機になったことや、印象的なできごとを綴った〝わたしの轍〟です。
「もう一度やり直せるのなら、もっとうまくできたはず」と思うことも多々ありますが、過去の失敗は未来へ生かそうと思っています。
自分の人生を振り返ってひとつはっきりと言えるのは、支えてあげたい、守ってあげたいと思う存在ができてから、自分自身が驚くほど強くなったということです。
昔だったらめげていただろうなと思うことも、子どものことでしたら、どこからともな

く膨大なエネルギーが湧いてきます。
昔は、〝支えてあげなければ〟と思われることの多かった頼りないわたしでしたが、じつは人を支えたい、応援したいと思う「肝っ玉かあさん」（古いですね）タイプだったことも、自分自身の嬉しい発見でした。

未来を考えるとき、誰でも不安なことがいくつかあるでしょう。
明日からの自分のライフキャリア（轍）を設計していくにあたり、未来を予測し、指南してくれる「キャリアの教科書」があれば安心できるのかもしれません。ですが、残念ながら未来は誰にも予測できません。
綿密な設計図を描いても、わたしたちが過去に経験したバブル崩壊や、リーマンショックのような経済の急な変化で、進もうとした道が突然閉ざされることもあるでしょう。キャリアの方向転換を余儀なくされることもあるでしょう。
未来は予測できないものですが、でも、今キャッチできる未来の情報があるなら、なるべくキャッチして準備しておこうよ、と思うのです。

その一つの方法として、わたしは新聞や雑誌から、未来について書かれている記事をスクラップしています。

いつも注目しているのは、「経済」「文化」「環境」「制度」「教育」「技術」「インフラ」などの新情報です。3年後に実施、5年後に実用化予定など、この先に何が変わるのかを覗くことができるので、タイムマシンに乗ったような感覚で、何となく未来が見えてくるから不思議です。

わたしは、定期的に、雑誌や新聞の切り抜きから面白いと思われそうな新情報を、子どもたちに発表するということをしています。

始めたのは、わたしが大学院に入学した2009年。切り抜きも、今ではずいぶんな量になりました。

「3年先にオープン予定」などという記事を読むときは、「本当かな？」と疑わしく思うものですが、だいたいが実現しています。

「もしかして未来が読める占い師？」などと子どもたちから驚かれることもあります。もちろん、そんなすごい能力などあるわけがなく、ただ記事の受け売りをしているだけです。

人口減少問題など、社会問題化することの予測にも役立ちます。

キャリアという言葉の語源としていちばんポピュラーなのは、中世ラテン語だった「轍」説であることは、プロローグでお話ししました。

講演会などでこの「轍」の説明をするときは、皆さんに馬車のスライドをお見せするのですが、馬車には人が乗る座席が設置されています。

この座席を指して「コーチ」と言いますが、諸説ある「コーチ」の語源のなかでもポピュラーな解釈が、この「乗り合い馬車」のことなのだそうです。

たとえば、世界で活躍するスポーツ選手には必ず名コーチがついていますが、「コーチ」とは、つまり、人生のある地点で相乗りし、目的地に向かって一緒に進んでいくパートナーのことなのです。

とくに子育てをする親たちは、子どもにとってまさにコーチです。

コーチの語源・意味を知ってから、子どもたちの人生のある期間、同じ目標に向かって乗り合い馬車に乗っていこう、わたしが彼らのコーチになろう、そう思いました。

どうせなら優秀なコーチでいたいし、わたし自身がちゃんと学んでいなければ、これからの子どもたちのキャリアを、正しく導いてあげることもできない。コーチは頼りになる

からこそ、何かを教えられるからこそ、同乗するのだと思うのです。
コーチが不安そうな顔をしていたら、選手は不安になるでしょう。

キャリアには教科書というものはありません。あるのは、これまで地面に刻んできた轍を振り返り、これからを考えていくことだけなのです。
わたし自身、この本を書きながら自分の轍を振り返ることで、これから先、どんなキャリアの道を進んでいくべきなのかを、さらに深く考えることができました。
そして子どもたちの良きコーチとしても、これからの未来を楽しみながら歩んでいきたいと思っています。

午後には陽のあたる場所

つい最近、ユキが普通自動車の運転免許証を取得したのです。そのため、わたしは、我が家の自家用車の保険契約の内容を見直していました。

これまではドライバーの年齢設定を35歳以上にしていましたが、19歳の息子も運転するのならば全年齢をサポートするものに変更しなくてはなりません。

「今の35歳以上プランなら、年間約12万円……」

見慣れない自動車保険のホームページに苦戦しながら、ユキの年齢を入力して保険料をシミュレーションしてみると、「全年齢プランなら……年間約26万円!!」。

そんなに高くなるなんて、と驚いたり、慌てたりで、すぐにユキを呼びつけました。

「ユキー、大変よぉ、ちょっと来てぇー」

「なんですか?　どうしたのですか?」

と、ユキは2階から、わたしの居る1階のリビングにドタドタと急いで下りてきました。自動車保険のホームページの画面を見せるために、ノートパソコンをクルッとユキの方に向けました。
「免許をとってから全く運転していないようだけど、このさき運転するの？」
「……たぶん、運転する」
「いやいや〝たぶん〟じゃ勿体ないからさ、はっきりしてほしいのよ」
「……運転する。だから、この全年齢にしてもらっていいかな？」
「本当に乗るのかなぁ？」
などとブツブツつぶやきながら、わたしは変更手続きの手順を読み始めました。
すると、ユキが言います。
「母さんがインフルエンザで高熱出したときに、夜中にふらふらしながらタクシーを呼んで、一人で救急病院に行ったじゃない？　ああいうのって、見ていられないんだ」
「大丈夫よ、そのくらい一人で行けるもの」
わたしは、強がりではなく本当に平気なのです。そういうタイプなのです。
「そこを直してほしいんだよね。僕らは夜間の救急外来に行くとき、いつも母さんの車に

乗せてもらっているじゃない、小さいころからずっと」
「だって親だから当然でしょ」
「だったら、僕だって当然だよ、母さんが病気のときは、自分が運転して、母さんを連れていってあげたい。母さんを手伝いたいんだ」
いつになく真剣なユキ。
「母さんの欠点は、人に甘えることが下手なところです！」
叱られている、そんな感じでした。
じつは、自分でもずっと前から気づいていました。幼いころから、「迷惑をかける人」と思われるのがすごく嫌で、身近にいる家族にさえ、甘えられないところがありました。どんなに重い荷物でも「平気、平気！」と無理して運んでしまいます。
もともとの性格なので、しょうがないのです。
「僕も妹も、ずいぶん大きくなったわけだから、少しは頼ってほしいんだよ」
この言葉には驚きました。いつの間にこんなことを言えるようになったのでしょうか。
子ども達に甘えることを覚えていってもよい時期がきたということなのでしょうか。

声には出さず、「うん、うん」とユキに向かってうなずきました。
「お母さーん、学校のセーターが小さくなったの。ひとつ大きいサイズを注文してもいい？」と、サユの、のん気で大きな声が聞こえてきました。
ユキの気持ちにしても、サユのセーターが小さくなったことにしても、成長の証です。

お母さんは、少し甘えてもいいですか？
もっと女優業もやりたいです。
長期間、家を空けてしまうときは相談しますね。
大学の先生としても、もっと成長したいのです。
前から考えていた資格に挑戦してもいいですか？
芸能活動と大学教員、そして母親業。どれも頑張っていきたいです。
もともとよく笑うわたしですが、これからは、もっともっと笑顔が増えていきそうです。
ありがとう！　わたしは幸せものです。

―あとがきにかえて―

今、世の中の状況はどんどん変わってきていると感じています。

わたしが1996年に長男を産んだとき、「子どもを産んだら芸能界はもうやめるんだよね」と、多くの人に言われたことを思い出します。

仕事場に子どもを連れてくることは、プロとしての意識に欠ける。そんなことが声高に言われていた時代でした。

そこには、同性からの厳しい声も含まれます。

「（あなたとは違って）一生プロでいたいから、子どもを産まない道を選択した」

そんなふうに言われたこともありました。

ユキを産んで今年で19年ですが、ライフキャリア（轍）を見直したい人にとって、確実に追い風が吹いていると思います。とくに女性が働くことに対しては、そう感じています。

芸能界を見ても、楽屋にお子さんを連れてくる人も多くなりました。そして、それを「NO」と言うと、言った人たちが逆に理解されない時代になってきています。

39歳のときに、さらに成長したい、新しい知識を学びたいと切実に感じ、行動に移してから、さまざまなことが見えてきました。

人生の正午を過ぎ、自分のライフキャリア（轍）を改めて振り返ることもできましたし、わたし自身がこれから先の未来にどんな轍を描いていきたいかを、しっかりと意識することもできました。

ライフキャリアのいいところは、過去のことは変えられなくても、ここから先に進む道は、自分の工夫次第でいい方向にも変えられそうだ！と考えられるところです。

わたしは、タレントとして、また客員教授として、講演や授業を通して、これからもあらゆる年代に向けて、よりよいキャリア形成を応援し、少しずつわたしなりの提案を続けていこうと思います。

いずれにしても、人間にはどんな人にも平等に終わりがきます。

その最期のときまで、自分がどんな轍を残していくのかを考えながら、そして楽しみな

がら歩んでいきたいと思います。

これまで同様、周りの皆さんの支えに感謝しながら。

そしてもしもこの本が、読まれた方にとって、ご自身の未来の轍について考えるきっかけとなったなら、これほど嬉しいことはございません。

菊池桃子

菊池桃子　Momoko Kikuchi

1968年5月4日東京都生まれ。
1983年、アイドル雑誌『Momoco』創刊号の表紙を飾りデビュー。翌年、映画『パンツの穴』のヒロインとしてスクリーンデビューし、同年、『青春のいじわる』でアイドル歌手としてもデビュー。ブロマイドの年間売り上げ記録1位や、1985年の日本武道館のコンサートでは、ビートルズの持つ観客動員数の記録を抜くなど社会現象となり、清純派アイドルとして絶大な人気を誇る。第26回日本レコード大賞新人賞、日本レコードセールス大賞、エランドール賞新人賞など、数々の賞を受賞。また4枚目のシングル『卒業-GRADUATION-』から『アイドルを探せ』までの7枚連続オリコン1位の売り上げを記録。女優・歌手活動のほか、CM・ナレーション・ラジオパーソナリティ・講演・婦人雑貨のブランドプロデュースを務めるなど多彩な方面で活躍。2012年3月法政大学大学院政策創造専攻修士課程修了。研究分野は「雇用政策を踏まえた人々のキャリア形成」。

撮影……………………齋藤清貴［カバー、巻頭口絵］
スタイリング……上田実穂
ヘアメイク………古屋明子
装丁…………………小栗山雄司
構成…………………有動敦子
編集…………………井関宏幸（株式会社扶桑社）
DTP…………………Office SASAI
協力…………………株式会社パーフィットプロダクション
撮影協力…………戸板女子短期大学

午後には陽のあたる場所

発行日　2015年12月17日　初版第1刷発行

著　者　菊池桃子

発行人　久保田榮一
発行所　株式会社扶桑社
〒105-8070　東京都港区芝浦1-1-1　浜松町ビルディング
電話　03-6368-8870（編集）
03-6368-8858（販売）
03-6368-8859（読者係）
http://www.fusosha.co.jp

印刷・製本　中央精版印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。
造本には十分注意しておりますが、落丁・乱丁（本のページの抜け落ちや順序の間違い）の場合は、小社読者係宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします（古書店で購入したものについては、お取り替えできません）。

ISBN978-4-594-07393-0

